



Symposium Report

2013年研究会報告

アート×ナラティブ×災害トラウマ

——記憶の紡ぎ手の役割を考える——

日 時：2013年3月14日（木）

場 所：甲南大学18号館3階 講演室

◆主催

本研究会はJSPS科学研究費助成事業の助成を受けたものです。

「生活史法による臨床物語論の構築と公共化」

（代表・森岡正芳 分担・森茂起 研究課題番号：24243066）

「視覚芸術におけるトラウマと心理ケア

——芸術と臨床の連携に向けた歴史研究と理論構築」

（代表・石谷治寛 研究課題番号：24720084）

◆協力：甲南大学人間科学研究所

総合司会（石谷治寛）

- ・ 森茂起「戦時体験の語りとPTSDの心理療法」
- ・ 吉川由美「生きる力の取り戻し——南三陸町でのアート活動」
- ・ 問題提起と討議・質疑 1
- ・ 石谷治寛「アートの創造性を公共に媒介する
——セラピストとメディエーター」
- ・ 討議・質疑 2

■趣旨説明

司会（石谷） 簡単な挨拶をさせていただいてから森茂起先生のお話、吉川由美さんのお話を伺いまして、討議をさせていただきたいと考えております。昨日は雨でしたが、今日は天気がよくて、非常に気持ちのいい日となりました。皆さま足をお運びいただきまして、ありがとうございます。遠くから来てくださった方もいらつしやると思いますので、今日の議論が実りあるものになればと思います。

今日は「アート×ナラティブ×災害トラウマ」記憶の紡ぎ手の役割を考える」と題しまして、講演・研究会を行います。とりわけ吉川由美さんには、お忙しい中はるばる仙台からご足労いただき、大変感謝しております。また、森茂起先生にも感謝します。アート活動とPTSD（心的外傷後ストレス障害）についての討議ができないだろうかと話を持ちかけたところ快く返事をしていただきました。また、今日は神戸大学から森岡正芳先生に来ていただいています。科学研究費の支援でこのような企画を催すことができました。ありがとうございます。

今回の企画は、昨年の一二月にアートミーツケア学会で吉川さんの南三陸町での活動についてのお話を聞いたときに着想しました。そのとき初めて、吉川さんは震災以前から宮城県内・

仙台市内の地域再生プロジェクトの一環としてアート活動に取り組んでおり、その経験が震災後のアートを通じた被災者の支援活動につながったというお話を伺いました。

その中で印象に残ったエピソードはたくさんあります。後でお話したばかりこの話もそうですし、小学生のクラス全体で歌を作って音楽活動に取り組むという活動についても伺いました。その時、つらい経験を訴える子どもがいたもののクラス全体で音楽活動に取り組むことによって、全員で合唱できたというエピソードが非常に印象に残りました。おそらく被災地の子どもの少なからずがPTSDに直面しているのではないかと推測されるのですが、吉川さんのお話を聞きながら私が直感的に感じたのは、アート活動が人々をつらい経験にさらさせることになるのと同時に、援助者とともに経験を分かち合うことによって、それを乗り越えるきっかけにもなり得るのではないかということでした。

震災後、アートを通じた地域復興の取り組みは全国で数多く行なわれましたし、その中で「震災を忘れない」という掛け声の下、震災の記憶や経験を語るといふ観点に焦点を当てた活動も広く行なわれています。災害から二年経って、展覧会など、いろいろなタイプの活動が日本全国で行なわれています。私もその一部を展覧会などで見ることはできましたが、まだ全貌は整理しきれていない段階です。今回後ろのほうに資料を用意し

ましたが、阪神・淡路大震災以後のアート活動はいまや年表で整理されており、その頃の経験が活かされ、東日本の大震災では芸術の領域でも熱心で幅広い取り組みがなされてきているように思われます。

しかし、今回の被害は海外の報道でトリプル・ディザスター (Triple Disasters) などと言われますように、震災、津波、放射能事故の三重苦である上、また主に気仙沼、陸前高田、南三陸町をはじめとして、県をまたがる非常に広範囲にわたる被害でした。災害とアートと言いますが、美術館自体の被災から、個人のアーティストの喪失の表現、復興支援、そのサポートのための活動や、亡くなった方々の喪や哀悼の試みまで非常に幅広く行なわれています。

前置きとしては少し長くなりますが、その中から、国際的にもよく知られた写真家である畠山直哉さんの言葉を簡単に紹介しておきたいと思います。畠山は震災前後の故郷を撮影した写真集『気仙川』『河出書房新社、二〇一二年』のあとがきで、自分がかつて作品集に書いたことを振り返っています。

「僕には、自分の記憶を助けるために写真を撮るという習慣がない。僕は自分の住む世界をもっとよく知ることのために、写真を撮ってきたつもりだ』『ライム・ワークス』『シナジー幾何学、一九九六年』。畠山はかつて、日本の近代的な構成的写真やベツヒャー夫妻の即物主義的な美学を思わせる、石灰石の

鉱山や工場、その周りの街の風景などを撮ってきました。それらはコンクリートに囲まれて生活するわれわれの日常的な風景を形作っている下部構造ないしは無意識を象徴するものだと見えるものかもしれません。その後、採掘のための鉱山の爆破現場の瞬間写真によって称賛されました。情緒を排した即物的な記録としての鮮烈さが衝撃を与えたのです。

しかし畠山自身、震災以後、自分の故郷の写真の意味や自分の美意識が根本的に変わってしまったことを、この『気仙川』という本では認めています。このあとがきで、これまでである種の場所を欠いたイメージとして撮られた写真に、自伝的な記憶の思い出を付与せずにはいられない、と言っています。実際、鉱山の風景は、彼が育った陸前高田市の環境と切り離せないものでした。さらに『ライム・ワークス』やその後の採掘現場での爆破写真をいま眺めますと、高度経済成長の終わりを象徴するとも言われる、神戸の震災によって自分の立ち位置が揺らいでいると感じたあの頃の崩壊の気分を思い起こさせる作品であるような気がしてきます。

畠山は、『気仙川』として発表するまで、故郷の写真について公開するつもりはなく撮っていたようですが、次のように書いています。

だが確かに大津波はやって来て、いくら事実だとは信じられなくとも、故郷のすべてを潰し、流し、消し去った。家、商店、橋、樹

木、人々。既にそこで長い時間を送り、これからも永遠に続くことを願われていたそれらは、理解することがとうてい無理なほどの巨大な力によって、短時間のうちにこの世の外に運び去られてしまった。その時以来、箱の中の写真は、意味合いを変えた。故郷の姿はいままで人々の記憶の中と、写真の中にしか存在しない。どうということもなかった僕の写真は、僕の意図とは無関係に「記憶を助ける」ものに突然変化してしまった。姉齒橋はどのような形をしていたのか。酒屋の隣には何があったのか。あの人はどんな歩きかたをしていたのか。それを懸命に思い出そうとする時、僕にはもうこのわずかな写真しか、手がかりとなるものがない。「気仙川」あとがき」

写真につきまとう「記憶」を取りのぞいていくための美学を練りあげていた作家にとって、写真は現実から距離を保つためのある種の防衛機制として働いていたでしょう。しかし震災以後、「記憶」の侵入を抗うことができないという気持ちの変化の瞬間が——いわば心の決壊の壊れる瞬間が——この一節の中に表明されているように思います。過去の記憶がフラッシュバックとして蘇ってくるというPTSDの症状にも近い、写真家の心の動きが誠実に伝えられているように思います。

さらに畠山はこう続けています。

出来事としての東日本大震災の後では、今この世にいる人間すべてが「生存者」であるように僕には見える。……今でも心ある人た

ちが発している「忘れるな」という呼び掛けは、「震災という出来事を忘れるな」「被災者のことを忘れるな」「死者のことを忘れるな」という意味だけで発せられているのではない。あるとき僕らの多くは真剣におののいたり、悩んだり、反省したり、義憤に駆られたり他人を気遣ったりしたのではないか。「忘れるな」とは、あのと自分の心を自分が「真実である」と理解したさまざまな「忘れるな」ということなのだ。

畠山が強調するのは、死者のための喪の仕事の重要性だけでなく、トラウマティックな出来事が起きたまさにそのときの感情的な心の動きを思い起こすことの必要性です。これはトラウマ的な記憶に向き合うためにも重要な心構えだと思われまます。ただし、記憶を忘れないでいようとすることは多大な心理的ストレスとしてPTSDを悪化させることにもつながる恐れがあります。こうしたことについては森先生にご意見を伺うことができるかと思えます。

このように災害というフィルターを通してみると、アートの持つ記憶の力がとりわけ目立ったかたちで浮かび上がってくるのですが、アートや語り（ナラティブ）を通して人々の記憶に触れることがPTSDの症状などに左右するということが十分に検証されないまま活動の数が増しているのも現状です。

さらに、PTSDはトラウマティックな体験の二、三年後に発症する可能性が高いとも言われています。被災者のアートへ

のかかわり方はさまざまで、個人的な経験のあり方もさまざまですが、アート活動は、新たな記憶の共有を可能にする一方、他方で個々の体験の違いといったものを浮き彫りにします。それゆえ、場合によってはPTSDの症状を顕在化させるといふ懸念も生まれてきます。

あるいは、支援者の側がPTSDに悩まされるという報告も多々あります。そのとき心理学の専門家のサポートは必須でしょう。最近、被災地の心のケアに関する報道も増えてきましたが、例えばPTSDの発症数は増加しているものの、心理的な問題をサポートする人材の不足が指摘されたり、あるいは被災地で配偶者間暴力(DV)の深刻化も指摘されたりしています。その関連で、児童虐待を誘発する可能性の危惧も報道され始めました。トラウマの語りにくさというのは、個々の事象が複雑に絡み合っていることと、さらにそれがあまりにも複雑なために、逆に耐えきれずその連関を遮断しようとする力が強く働いてしまうところにも現れてきます。

私が所属しております甲南大学人間科学研究所には現在、臨床心理学の分野でPTSDの診療に携わっている専門家が多数おりますし、私自身も哲学や芸術学の観点からトラウマや心理学の問題にアプローチしてきました。当研究所の設立の経緯として阪神・淡路大震災が大きいかかわっているということとも無縁ではありません。今回の企画の個人的な動機としても、災

害という話題を通して、今こうして話をしている場所の持つ意味を振り返ってみたいということもありました。とりわけ、最初にお話しいただく森茂起先生は精神分析学や臨床心理学を専門にされておりますが、PTSDの臨床に詳しい方です。森先生は特に神戸の震災の際に臨床心理士としての支援活動を積極的にこなっており、描画を用いた心理サポートなども行なっていたと聞いております。そういったお話を今回伺えるのではないかと楽しみにしております。

トラウマ・ケアの専門的な方法の一つとしてアートセラピーという分野もあります。災害とひとくくりにはなれる中で現れてくるさまざまな心の問題に柔軟に対応できる心理的、医学的なサポートとアート活動は現在ますます重要な課題になってきているようにと思われれます。

今回は、まず臨床心理学の専門家の立場から森茂起先生にお話を伺い、次に吉川由美さんのアート活動での現場のお話を伺いたいと考えています。そして、休憩を挟んだ後、意見交換の後、美術史とトラウマの問題に関心のある研究者の立場から、わたくし石谷が臨床心理学とアート活動という異なる分野の接点を考えるための議論の整理を行ないたいと思います皆さんにもさまざまな専門家の立場から議論に加わっていただければと思います。今回の会が、さまざまな経験や専門的な知識を生かし、異なる専門家同士が連携していくための参考となれば

幸いです。

では、森茂起先生からよろしく願います。

■戦時体験の語りとPTSDの心理療法 森 茂起

森 この研究会は、トラウマに関心を持つ芸術研究者の石谷さんが研究所におられることで実現しました。このような意義深い企画が実現しまして大変うれしく思います。今、研究所の設立に阪神・淡路大震災が関わっていることに触れて下さいました。この土地には、震災前も今と同じく一八号館と呼ばれていた日本家屋がありました。震災で全壊しました。写真のように本来にべしゃんこになり、心理学の必要性が大学に認識されたのと時期が重なったものだから、跡地利用でこの建物の建設が実現しました。震災がなかったら、この建物はなかったことになります。

今日の私の話は、「戦時体験の語りとPTSDの心理療法」と題しています。戦争の話を中心にしながら、震災の話も交えるという形にしたいと思っております。最近、戦争に関する研究や実践を積み重ねていまして、そこから見えてきたものを紹介します。

副題の、「NETとITTの経験より」に含まれるNET (Narrative Exposure Therapy) とITT (Integrated Testimony

Therapy) は、いずれもドイツ起源の心理療法の名称です。本研究所が中心となって日本に導入しています。まだ日本には浸透していませんが、NETは最近関心を持たれていまして、関東でも実践例があります。共通する特徴が二つあります。まず、体験を徹底的に、ありのままにできるだけ詳しく振り返ることです。もう一つは、その内容を文章にして残すことです。

心理療法は必ずしも体験を徹底的に振り返るものばかりではありませんので、こういった心理療法だけが標準とは思わないでください。心理療法の中には体験を振り返らないほうがよい、振り返ることが危険であるという考えに基づくものもありますので、さまざまな立場があることを申し上げておきます。

私の主題をまとめますと、主として戦争にかかわる記憶の聞き取り、記録の経験から、トラウマの「記憶」「聞き取り・語り」「聞き取り」と「語り」は一つの営みを逆の立場から見た言葉です。「記録」「理解」といった事柄について考えることとです。そして、その全体を通して生じる「トラウマ性心的要素の変形」について考えます。

最後の部分は耳慣れない表現かもしれませんが、トラウマが生んだ心の要素があり、それがどのように変わっていくのかという問題です。「変形」は英語の transformation からの訳語です。心理療法では、その要素を、もちろん、創造的な、あるいは心の健康に寄与する方向に変えていきたいのです。あるいはこの

表現が作為的な印象を与えるとすれば、変わるプロセスを支えていきたいと言う方がよいかもしれません。体験を振り返ったり、聞き取り・語りを行なったり、記録したり、理解したりする営みの全体がそのプロセスに関わっているといったお話しになる予定です。

今日使います私の経験には、先述のNETとITTのほかに、研究所で行っている戦争体験調査があります。この調査もドイツからの影響を受けていて、Kriegskindというドイツ語を、日本語として少しごちないですが、「戦争の子ども」と訳して研究主題に掲げています。子ども時代に戦争を体験した世代から戦争体験を聞いて記録にとどめていく心理学的および精神医学的調査を日本でも行ないたいと考え、関西地域でここ何年か進めてきました。その成果の一部は研究所の叢書として出版しました。あと、私は阪神・淡路大震災後の支援活動に携わりましたので、その経験も背景にあります。

ITT

ITTは、ドイツのベルリンにあります拷問被害者治療センターのスタッフが中心となって開発した技法です。これがITTのパンフレットです。戦争や拷問被害によるPTSDの治療技法として開発されたものです。

すでに高齢に達している第二次大戦の戦争体験者が抱えるPTSDを治療しようとするとき、治療面接を困難にする要因があります。まず地理的距離の問題があり、地方に暮らしている方にとつては、近辺に治療センターのような資源がありません。遠方から通うことは体力的に困難です。近くでも健康問題から通うことができない方もいます。また、匿名で体験を語りた方もあります。戦争体験には恥や罪悪感に結びついた体験が多く、顔を見せて語ることを避けたい方があります。そうした場合のニーズを考えて、メールや手紙を介して自伝執筆を行うことでPTSDを治療しようとしたのです。

治療者による教示の手紙と、返信の交換によって自伝執筆を進めていきます。執筆の段取りは構造化されており、一〇回の執筆からなっています。治療者は一回の手紙を出すことになります。最初の申し込みや契約のプロセスは別にして、治療に入りますと、最初に治療者がメールを出して、それに返答という形で始まって、最後に治療者から、仕上がった自伝と手紙を送って終わります。

Eメールで実施できますので、どんなに遠方であっても全く問題がありません。日本で実施する場合、高齢者でメールを使う方がまだまだ限られていますので、手紙やファックスを利用しています。内容的には手紙でも差支えないのですが、日程的にタイトになります。週二回の実施が標準ですので、手紙が届

いてすぐ内容へのコメントと次回のための教示を返送しなければ間に合いません。

執筆に使う日時は、たとえば火曜と金曜の何時から45分間と決め、その時間内に集中して過去の体験を文章化します。先程構造化と表現しましたのはこういう設定のことを指します。

「自由に体験を書いてください」という形はとりません。治療面接のように、あらかじめ決められた時間のなかで執筆することが安全を確保することになります。書きたいときに自由に書くという形をとると、過去の辛い体験を思い出して長時間書きすぎることもあり、明日書こうか、いつ書こうか」と常に迷いながら生活しなければなりません。なかなか書けないしていると、今日は書けなかったと罪悪感が生じかねません。治療者との打合せでスケジュールを決めておき、それに従って予定通りに進んでいるという感覚が執筆作業を安全に進めるために重要です。送ってこられた内容に対してコメントして、「次はこんなふうな内容を書いてください」と応答します。自伝を書くという作業から普通想像されるような、マイペースで書く作業ではありません。

一〇回の執筆を三つのパートに分けています(表1)。パート1では五歳まで、五〜一二歳まで、一二〜一七歳までと、まず子ども時代の体験を三回で書きます。四回目で、子ども時代にあった特に大きなトラウマ体験に絞って、もう一度詳しく書

表1 ITTにおける三つのパート

パート1		パート2		パート3	
1	出生～5歳	5	17～30歳	9	子ども時代の自分への手紙(下書き)
2	5～12歳	6	30～50歳		
3	12～17歳	7	50歳～現在		
4	特に大きなトラウマ体験に絞って再度記述	8	書き残した部分の追加	10	手紙完成

いてもらいます。戦争の体験者を対象にしていますから、ここに戦争体験が含まれます。戦争体験で最も辛い体験、つまりはトラウマ的と考えられる体験を四回目で扱います。

パート2の五〜七回では成人してから現在までの間を書きます。書き残した部分の追加を八回目に行います。

パート3の内容は興味深いもので、子ども時代の自分への手紙は、過去の自分と現在の自分を分化させながら、良好な関係を形成することを目指しています。まず九回で下書きをして、一〇回で手紙を完成させてITTのすべての過程を終わります。ドイツではすでに多くの実践例があり、効果検証も行われています。

研究所で実施した例を紹介します。この方は実施当時七七歳です。戦争体験に起因する悪夢と夜驚発作が、体験直後から現在に至るまで続いていた方です。

この方は、普段メールを使用されていますが、キーボードで文章を書くのは苦手ということでしたので、自伝は手書きしたも

のをファックスで送り、こちらからの応答はメールで送信するという形で週二回の執筆を行いました。効果を測定するために健康チェックを行いました。心理療法の研究を行う場合には、効果検証のためのアセスメントが必要です。

この方の場合、実際には、全一七回の執筆になりました。標準の構造に従って一〇回の予定で開始しましたが、一回の予定の内容が二回に渡るなどで回数が増加し、一七回になりました。このように予定外の状況が生まれることは少なくありませんが、臨床的判断によって柔軟に対応する必要があります。実施後の健康チェックと一年後のフォローアップをしています。

細かく説明しませんが、このスライドにやりとりの流れを示しています。三、四回目で空襲体験の記述が出てまいります。この方にとっては、空襲体験だけではなく、お兄さんが戦後復員されてから体を壊して亡くなったことも、重要なトラウマ体験になっています。七、八回の間にコメントがないまま二回続いています。その前の回に二回分の予定を立てていますので、偶然抜けたわけではありません。

興味深いことに、パート3の子どもの時代の自分への手紙は、「書こうとしたけれどもできない」という返事が返ってきました。結局、どうしても難しいということだったので、振り返って今の気持ちを書くことで終わりました。ドイツの例では、抵抗なく子ども時代の自分に対して手紙を書けるようですが、日

本の方は気恥ずかしいというか、抵抗を感じるのかもしれない。特にこの世代の方がそうなのかもしれません。今まで実施したお二人とも書かれなかったもので、日本の文化が関わっている可能性があります。まだ少数ですので結論的なことは言えません。

第三回目の私からの返信の内容を一部ご紹介します。

T様

空襲の中を命からがら叔母様のお宅まで逃げられた体験を読ませていただきました。防空壕から出るという決断を、お母様もその理由がわからないとおっしゃったとのこと、本当に紙一重の脱出であったことがわかりました。

記憶のない部分について「放心状態」であったのだろうという推測は、まさにそのとおりなのだろうと思えました。ご自身命の危険を感じ、また凄惨な光景を多数目撃されたことでしようが、放心状態が恐怖やショックを和らげられてくれたのかと推測しましたがいかがでしょうか。

もしそうであれば、命の危険が去った後に訪れた焼け跡の光景のほうが、強い恐怖やショックを感じられたのかもしれない。

続きの部分についても、書き方は前回と同様です。繰り返すようになりますが、同じ説明を下括弧内に書かせていただきます。

記憶のない部分について、体験者の方が不安感や罪悪感を覚えることがあります。覚えておくべきなのに思い出せないとい

う感覚です。トラウマ体験に関する知識に照らしますと、記憶に抜けたところがあるのは、子どもとして、あるいは大人でも普通のことです。自分を守るための自然な働きです。そのことを伝えて、安心していただくようにしています。その後、「命の危険が去った後に訪れた焼け跡の光景のほうが、強い恐怖や見たショックを感じられたのかもしれない」と続けています。その文は、「正常なこと」と受けとめていただくためです。次の文は、次回への教示です。

当時の状況にしっかり集中してください。何を経験したか、何を目撃したか、何を聞いたか、どんな匂いがしたか、何を感じたか（不安、悲しみ、絶望、混乱・・・）、体の反応（たとえば、手の冷たさ、心拍、吐き気、震え・・・）などです。何度も何度も頭に浮かび、夢に出てくるような場面がありましたら、特にその部分に集中してください。

ここで伝えているのは、辛い内容にできるだけ意識を集中していくという方針です。治療効果に関わる重要な部分です。

その際、正確な出来事の順序はそれほど重要ではありません。もし、ある出来事から別の出来事に飛んだとしてもかまいません。それよりも、その状況で感じたことに注意を向けてください。その状況で、何を考え、何を恐れたでしょうか。特に重荷になったり、恥ずかしかつたりしたような感情や考えに注目してください。今まで一度も話したり触れたりしたことのない体験がありましたら、特に

その部分をしっかりと扱うようにしてください。

「今まで一度も話したり触れたりしたことのない」体験は、それだけ話すのがつらい、触れるのがつらい体験のほうです。それから、そこにしっかりと直面することで治療効果が生まれます。

今回も、まず二、三分時間をとって、その時代に気持ちを集中し、体験が目につかぶようにしてから書き始めるといいでしょう。そして、四五分間、できるだけ詳しく書いてください。

次は、この教示を受けて書かれた自伝の一部です。大阪空襲で空襲に遭われた方で、一度、親戚宅に避難されたのち、焼け跡の家を訪ねたときの体験です。家に留まった方々はどうなったのかと、安否を案じてお母さんと一緒に戻られた。その日の出来事です。

ナンバから徒歩でしたが、とにかくものすごい情景でした。目につくのは、コンクリート造りのビルなどと、蔵しかなく、*「ガレキ」*の山で、まだ煙がくすぶっているのもあり、白塗りの蔵も炎と煙で、真黒になっていました。

少し割愛して、続きの部分です。

とにかく防空壕に残っていた人達の安否をと、いうことで焼け跡を探しました。一面焼けてなにもなくなっている焼け跡は、道路（遊廓の並んでいた道）は判るのですがどこに我が家があったのかさっぱり判りませんでした。

遊廓街ですので、その意味で歴史的にも貴重な証言です。次の場面はちよつときつかもかもしれませんので、苦手な方は目をそらせるなどして下さい。

たまたま我が家では、お女郎さん達の写真を飾ってあった飾り棚が、大理石で造作してあったので、この大理石が目印になりやつと見つかりました。焼け残った材木・コンクリート片・トタン板などを取り除き、防空壕の所在を見つけ、一メートル角位のタイル張りコンクリートの蓋をこじ開けたとたん、熱風が出て、なんとも経験したことのない、異様なにおいがしました。うすい煙がなくなつて内部が見えた瞬間、黒いかたまりがいくつも見えました。真黒に焼け焦げた遺体が折り重なっていました。手をにぎりしめ上に突き上げていた遺体。人をかきわけているような遺体。壕の壁をかきむしっているような遺体。上向きで横になり両手をにぎりしめ上に突きあげてる（ママ）遺体。とにかく性別も判らない程、焼けて真黒に焦げていました。とにかく地獄絵そのものでした。当時の私は小学五年、この年令のものにはあまりにも強烈すぎる情景でした。たゞ、呆然として、おせんさんのモンペをにぎりしめ泣き出したそうです。この情景が六〇年余を経た私の脳裏にはつきり焼きついています。

この時の情景とみなと町周辺で見た情景とが重なりトラウマとなり、現在も年三〜四回就寝中にこの情景が、鮮明に浮びあがり、「ウナサレ」突然大きな叫び声をあげ、隣で寝ている女房が、とび上がる程、びっくりすることがあります。

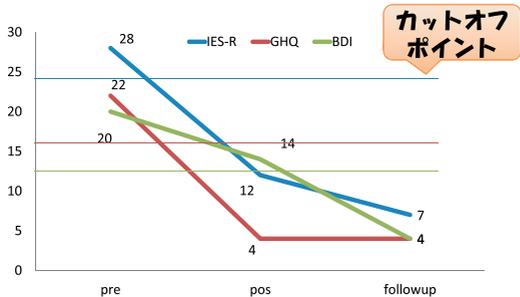
叔母が、あまり私等には見せないほうが良いと思つたのか、私と

兄を壕の見えない場所につれて行き、ここで待つてようにとのことでしたが、なんとも、ものすごい情景でした。母と叔母夫婦、など大人達はぼろぼろ涙をこぼしながら、遺体のかたづけをしていたのを覚えています。大人が、あれほど泣くのを見たことがなかったように思います。

まだ続きますが、ここがこの方にとって空襲体験の中で一番きつい部分です。子ども時代からあつた「ウナサレ」る体験はこの後ずっと続いています。この方は立派なお仕事に就かれて活躍された方で、仕事が忙しい成人期には比較的ましになりましたが、最近でもこうした症状があり、すっかり消えたことは一度もありません。

これは、PTSD症状の一つ、侵入症状に当たるものです。そして、こういう症状があるために、戦争のことはもう思い出したくない、戦争について考えたくない。人に話したくない、などの気持ちとなり、実際、考えないように、話さないようにして来られました。侵入症状と並んで重要な症状である回避症状に当たる状態です。医学的な診断を受けられたことはありませんが、今の基準で言えばPTSDをずっと抱えてきたことになりました。ただ、PTSDの診断基準が生まれたのは一九八〇年です、日本で使われるようになったのは、阪神淡路大震災後ですから、それ以前に医者に伝えたとしても、トラウマ性の症状と理解されることはなかったでしょう。

図1 IES-R、GHQ、BDIの結果



こんな風にして自伝を執筆していきます。お兄様が亡くなる
ところがもう一つの辛い体験ですが、お兄さんの死がそれほど
重い体験だったことには、自伝を書く中で改めて気づかれました。

I T Tの実施前と実施後と一年後の三回の健康チェック「I
E S - R、G H Q、B D I」の結果を見ますと、大きく症状が
軽減しているのがわかります(図1)。カットオフポイントと
いうのは、これ以上ですと健康上問題があるという基準です。

赤のGHQは一般的な健康状
態です。一番トラウマと直結
しているのは青のIES-R

で、PTSD症状を見るもの
です。緑のBDIはうつ症状
です。いずれも実施前には高
い数値でした。執筆作業が終
わったときに最初の二つは大
きく下がっています。うつ症
状はなだらかに下がって、ま
だカットオフポイントより上
にありましたが、一年後には
下がりました。一年間の間に
さらに下がっていくところが、

興味深いところですよ。

次の資料は学会用ですので細かな考察をしています。今日
は省略します。トラウマ症状は消失しているものの、不眠や食
欲減退で上昇した項目があります。加齢のためにやむを得ない
ところもあると思います。全体としては健康な状態で、ご本人
も非常に楽になったとおっしゃっています。一年後にも効果は
持続しています。

ここまですがI T Tの紹介です。手紙のやりとりによる自伝制
作を通じて体験の整理が行われ、トラウマ症状が軽減する様子
を分っていただけたと思います。

NET

次に、NETです。これは、対面で話を聞く治療技法です。
記憶の整理を目指すという点で、I T Tと理論と方法が共通し
ています。今日見本を置いています本『ナラティヴ・エクスポー
ジャー・セラピー』人生史を語るトラウマ治療』金剛出版、二
〇一〇年』は、私が仲間と翻訳しましたこの技法のマニュアル
本です。

NETでは、出生にはじまって、重要な出来事を時間に沿っ
て語っていった、最後には自伝が出来上がります。先ほどのI
T Tと違って、語られた内容を治療者が文章化します。治療者

が文章化して、次の回に読み上げて、修正点があれば修正しながら、言わば、語り手と編集者の協力によって自伝が出来上がります。最終回には自伝を最初から最後まで読み上げ、確認します。

この例はマニユアル本からの引用です。アフリカの紛争地域で子ども時代に銃撃に遭った方の例です。私はこの技法を、児童養護施設で子どもたちに実施しています。児童養護施設には虐待を受けた子どもたちが多数暮らしており、虐待による子どものトラウマの影響を軽減するために、NETは極めて有効な技法だと考えています。

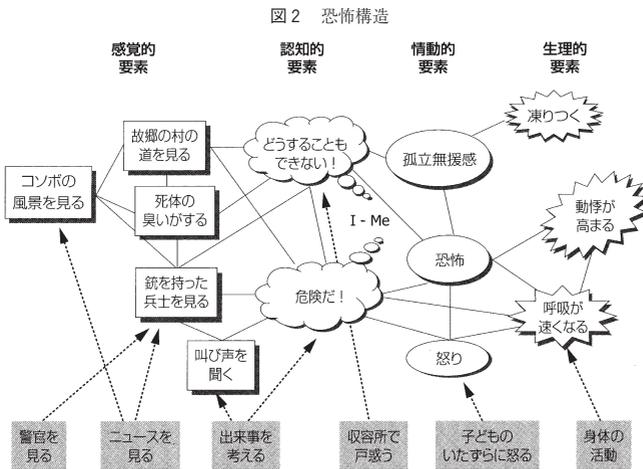
一つの例をお見せします。

〔個人情報保護のため、事例は割愛〕

こういうふうに文章化するとすごく冷静に語られたように見えますが、語るときにこんなふうに整理された文章で語られるわけではありません。質問を重ねる中で断片的に少しずつ語った内容をまとめて、治療者が文章化することで出来上がった文章です。

NET、I-TTの理論的背景

I-TTは一人で執筆する、NETは語りを聞き手が文章化するという点で違いますが、理論的背景は共通します。まず、P



TSDとは、恐怖体験がPTSDネットワーク(恐怖構造)を構成して、自伝的記憶を混乱させている状態と考えられます。自伝的記憶は、私たちが自分の過去について持っている記憶の全体です。恐怖構造とは、体験に伴う恐怖を核として、感情、思考、感覚、身体反応が強固なネットワークを形成した状態を言います。

これは恐怖構造の例を図示したものです(図2)。ある村で銃撃戦に巻き込まれた体験をモデルにしています。左側には、銃を持つ兵士を見た、死体の臭いがする、などの感覚的要素(Sensory Elements)があります。中央は考えたこと(Cog-

nitive Elements) と、感情 (Emotional Elements) の要素です。右側には体の反応 (physiological Elements) があります。たとえば心拍数が上がる、呼吸が荒くなる、体が固まるなどです。これらの各要素が結びついて、強固なネットワークを形成しています。

こうしたネットワークが存在しますと、引き金 (trigger) と言いますが、どこかの要素に触れると、体験全体が再生されるわけです。似た場面の写真を見た途端に記憶が意識に沸き上がってくる。そうすると、場面だけではなくて、体の固まり方とか、心拍の上昇とか、怒りとか、恐れとか、他の要素も出来事のだなかにあるときと同じように蘇ってくるわけです。一つの要素が活性化されると、全体が数珠つなぎに活性化される。この現象がフラッシュバックと考えられます。

体の反応が引き金になることもあります。例えば虐待を受けた子どもが、学校で体育の時間に走ってドキドキした。そのドキドキ感が家で殴られたときにドキドキしたのと似ていたら、ドキドキした途端に体験を思い出してしまうことがあり得るわけです。体育の時間に固まったり、パニック発作が起これたりするわけですが、他の人にはなぜその子がそんな状態になったのか全くわからない。そのために、わかつてもらえないという孤立感も伴います。

フラッシュバックが起こらないように、なるべく引き金に触

れない生活をしようとする、活動を抑えて、引きこもって、家にじっとしているのが一番安全ということになる。被害者が社会活動に復帰できない場合、PTSDに起因するこうした状態が関係している可能性があります。

これは、以前に研修会で使ったことがある図です (図3)。恐怖構造が自伝的記憶上のある部分にあると、その記憶が混乱しています。何力所も混乱があると、人生史のあちこちに触れにくい部分が生じます。たとえば虐待が長期間に渡って繰り返されますと、人生史全体が混乱した状態になり、過去を整理して認識できない状態になります。



図3

に、曝露と馴化の原理を用います。不安、恐怖と結びついている体験の記憶を徹底的に想起すると、不安の馴化が起これる(ピークを越えて、平常のレベルに戻る)という仕組みです。記憶に徹底的に直面していくと、不安が高まりますが、ある時間が経過するとピークを超え、少し楽になってきます。不安が十分下がりきるまで記憶を回避しないでいると、その記憶に対して不安反応が起きにくくなります。

たとえば、ITTの作業で言えば、記憶に集中して執筆しようとする、情景が蘇り不安と恐怖を感じます。しかしその情景を避けて文章化する作業を続けるうちについては恐怖が低

下します。ここで馴化が起こっているのです。思い出すと耐えられないと感じていた人が、思い出しても自分は大丈夫だという感覚を得ると、フラッシュバックとして意識に侵入することがなくなりやすくなります。これが曝露療法という治療法の原理です。ITTやNETは、この原理によって恐怖構造の解体を行いながら、自伝という物語を制作することで、記憶を時系列に沿って整理する作業を行います。それによって、記憶を構成する映像や音などの要素は、恐怖などの情動ではなく、その出来事が起こった時や場所の文脈に結び付けられます。

その結果実現するのが、ITTとNETのもう一つの治療的要素である、証言による人権回復です。いずれの治療でも、治療における語りは人権侵害に関する証言になっています。証言の一つの要素は、体験を他者と共有することです。自分の中だけにとどめておくのではなく、治療者に打ち明けて共有するだけでも、体験は一定程度社会化されます。ここまでは語りを通じた心理療法で行われていることです。しかし、文章化することにはそれ以上の意味があると考えられます。文章化は、記憶が結晶化され、一つの形となって残されることを意味します。後ほどアートとの違いを考えたいところですけれども、形となつて、自分の外にあるものとして残ることに意味があるのです。語る内容は自分の心から他者の心に伝わって、その人の記憶に残りますが、世の中には形として残りません。ここに質的差異

があるのではないかと思います。

文章化すると、不特定の他者への伝達可能性が生じます。その文章は他の人にも読んでもらうことができる。実際には読まなくても、読まれる可能性があるというだけで意味が違うわけです。たとえば虐待体験の記録が専門家に読まれることで、対策を刺激し、人権侵害防止への貢献になる可能性があります。あるいは、戦争がいかに悲惨なものかを伝えて、平和運動をより活発化することに貢献できる可能性があります。人権侵害の防止に貢献することが尊厳の回復になるのです。そして、人権侵害の認識は、同時に、自らの苦しみは被害の結果であるという認識であり、ノーマライゼーションを伴います。今まで苦しんできたのはそれだけ大変な体験をしたからであつて、自分が悪いからでも弱いからでもないことを理解することができます。その意味で、この二つの技法は、戦争体験由来のPTSDだけでなく、児童養護施設等の福祉領域になじむ技法と感じています。体験を伝えることができないと、自分の体験を誰も知らない結果になり、支援を得られず、社会の中に再統合されないという結果を招きます。

NETとITTは、曝露と馴化の原理と、証言による人権回復という二つの要素が治療効果につながっている考えられます。曝露と馴化は医学的、心理学的なメカニズムであり、証言は思想的、社会的、法的な意味を持ちます。扱う対象から当然のこ

とはいえ、心理学的考察だけでは不十分な実践であると考えられています。

これらは、震災被害についても利用可能な技法と考えています。昨年夏にN E Tの開発者に会ったとき、東北の震災で使えないのかとずいぶん気にされていました。東北大の先生もN E Tの研修会に来て下さり、使ってみたいと言われましたが、昨年の段階でしたので、治療という形でかわるのはまだできないという感触を持っておられました。私としても、使えるのはこれからではないかと思っています。

記憶・聞き取り・記録・理解

さて、これらの経験をする中で私が考えたことをまとめてみたいと思います。

記憶の共有という現象は、記憶がまずあって、記憶に基づいて話がなされ、それを聞き取って記録され、その記録からその人の体験を理解していく、というステップで進むものではないと考えます。というのも、記憶というものがあらかじめくつきりと形成されているわけではないからです。人に語ったり、文章にしたりと、何からの形にする中で記憶は形成されていきます。聞き取りによって語りを促進し、記憶の形成と整理を行なうしながら、推敲によって記録を作成する。その過程で生まれる

理解が聞き取りと記録の質を高めます。理解すると、より大切なところが聞き取れるようになります。それによって、記録がより事実に近いもの、質のよいものになります。これらの営みが相互に関連し合っています。直線的な過程の上にそれらの作業の順序を並べることができるとは思えません。詳しく説明するゆとりはありませんが、このような過程を支える器を、精神分析用語の「包容」という言葉で表現できると思います。トラウマが記録にも理解にも聞き取り・語りにもそれぞれ作用していて、その三つがぐるぐる回っているという図式を描けば、およそ当たっているでしょうか。

こうしたプロセスを通して記憶が社会化・公共化していくことが重要ではないでしょうか。自伝的記憶の形成は、文脈化された、人生の物語の中に組み込まれた記憶の形成を意味します。震災が、人生の流れの中に組み込まれていく。戦争でもそうです。虐待でもそうです。そうなっていくための営みの中に、「語り」も「文章化」もあり、いずれも社会化と言えますが、それぞれに対応する二つの段階を考えてもいいのではないのでしょうか。ここに「記憶の社会化A」「記憶の社会化B」と表記していますが、森岡先生主催のシンポジウムで仮に名付けたものです。文章化の中で推敲による処理が行なわれて、伝達可能性が高まります。一人だけへの伝達ではなく、多くの人に伝達されます。印刷されますと、伝達範囲がさらに広がる可能性と、

保存の可能性が生まれます。こうした過程によって記憶が社会化され公共化されることに意味があります。

「戦争の子ども・Kriegskind」プロジェクトも同じ問題意識で進めて来ました。このプロジェクトの趣旨については叢書に書きましたので、今日は割愛します。子ども時代の戦争体験研究はまだ必要です。記録されていない体験が多いことを実感します。今回私共が行ったインタビューだけでも、「この話はいしたことがない」という方が大勢おられました。そういう方は世の中にもっともっとおられるはずです。つまり、まだ語りの形にさえなっていない記憶が大量に存在するということです。

共有することの意義を考えると、個人の自伝的記憶と集合的な歴史との関係も考えていくべきでしょう。これは歴史家がオーラル・ヒストリーという形で扱っている主題で、叢書には歴史学者のスタッフが書いた文章も収録されています。

「記憶」「記録」は、社会的に位置づけられることで「証言」となります。個人として、治療のために語ることはもちろん重要ですが、それを社会の中にどう位置づけるかが、もう一つの重要な課題です。

阪神・淡路大震災の経験

最後に、阪神・淡路大震災の話をして終わりました。阪神・

淡路大震災で私が何をしたかということですが、今から考えたら何もできませんでした。今と違っていて、当時の心理士は、本当に何をしていたかわからない状況でした。臨床心理士という制度ができてしばらくたっていましたので、臨床心理士会として大震災の被害に対してなんらか貢献せねばならないという意識はすぐ芽生えました。北海道南西沖地震「一九九三年」で奥尻島に津波が襲った後、心理士が支援に入った例があり、これが日本で災害に心理士がかかわった初めての例とされています。阪神・淡路大震災よりも少し前の時期でした。阪神・淡路大震災では、その情報にも助けられ、心理士の活動が広がっていききました。

当時の活動形態は、心理士によってさまざまでしたが、私は避難所の市民に直接支援することはできませんでした。そのような活動にどこか違和感を感じたことが一つの理由です。この段階で心理士として直接市民へ支援するのは無理ではないかという感覚があって、学校への支援をすることにしました。再開した学校で、学校の先生方と子どもたちの活動の支援が何かできればと考えまして、小学校で描画グループワークを行ないました。

再開した学校で、授業時間を使って子どもたちに絵を描いてもらいました。治療という姿勢ではなく、特に「震災を考えよう」という言葉も使わず、「毎日生活が大変でしょう。今日は

この子たちの中にあるイライラとか、ストレスとか、震災の恐ろしさとか、さらには、そこから来る怒りといった、形にならないものが次第に処理されているように感じられないでしょうか。私はそんな印象を受けていました。震災の力は表現のしようがないものだったでしょうが、それを数字化して表現し、数字の多さで驚かす形に変えているのです。「すごいやろう。こんなに零が書けたんだぞ」という表現になっている。こういうやりとりがあった後、爆弾ごっこはやめて、普通の絵に変わっていきました。この子たちは震災の話を何もしていませんが、遊びを通して震災に由来する自分の心の内容に触れて、気持ちが一つと収まってきたような感じを受けました。

次の絵は、人間を全部飲み込んでしまう巨人の絵を描いています。これも震災と関係していると思わざるを得ない。人間を飲み込む大地震といった感じを受けました。次の一連の絵は、最初に「すぺーすごじら」を描いた子どもです。何枚か絵を描いているうちに、「ヒーローと亀の絵を描いて、「あのごジラがこの亀になっちゃった」と言いました。最初は巨大だった怪物がすごく弱々しいもの、かわいらしいものになって、彼の心の中に残っていた巨大なイメージが収まってきたのかと思います。

こんな活動をしていきましたが、形にならない心の内容を形にしていく作業になったのではないかと思います。それを可能

にしたのは、ファシリテーターとグループの子どもの関係、そしていくつかの班でこのワークを行っているクラス全体の雰囲気などの総合でしょう。

ただ、このグループワークは、一クラスに一回という形で多くの学校で実践しましたので、一つのクラスで継続することはできませんでした。ですから、その後の経過を検証できていません。この実践を国際学会で発表したことがありますが、「効果はどうやって評価したんですか」という質問が出ました。実際、評価できていません。さっきのＩＴＴやＮＥＴのように実施前と実施後にストレス等を評価して効果測定ができればよいでしょうが、震災後の活動の中でそんな評価はできないのが実際です。また、そういうことをする気にもなれませんでした。

グループワークの一回で何かが解決するということはないでしょう。ただ、例えば爆弾の絵を描いた子は、表現し難いものを表現する経験を通して、生活の中で何か気持ちが沸き上がったときにそれを何かで表現する力がついたかもしれない。つまり、ワークが一つのモデルとなって機能することが期待できます。

これはある精神分析理論による心の要素の変形過程です（表2）。上のほうにあるのが、意識や言葉ではとらえられない要素です。それを言葉でとらえたり、物語化したり、考えにしたり、人に伝えたり、さらには理論にしたり、そういう変形を日々

表2 「思考の成長」理論 (ピオン)

β要素
α要素
夢思考・夢・神話
前概念
概念
一般概念
科学的演繹体系
代数計算式



いった表現になると、抽象化されて、量の観念に変わっていきす。下のほうの概念に近づいてきています。そんなふう人間は心の生の体験を言葉で人に伝える形にしたり、そこから考えを生み出したり、人生観を作り出したりしているのです。

日常語でこの過程を表現しますと、心以前の体の反応、身体表現、ストレスといったものが物語や夢やイメージになり、そこから意味をくみ取ったり、より一般的に通用する意味になっていたり、そこから人生観・世界観が形成されていくということになります。ですから、私たちが自分の人生観と思っているもの、子ども時代から繰り返した経験から私たちがくみ取った意味が集積し、体系化されたものです。変形は常に行われていきますが、ときにはある段階の人生観、世界観で固まってしまっ

行なっているのが心の働きであるという理論です。上ほど具体的で生々しく、下ほど抽象化されます。先ほどの子どもの爆弾は上のほうの要素でしょう。もやもやを爆弾でぶつけているのです。爆弾の絵よりもっと生々しくなれば、殴つてしまおうという行動に出るかもしれません。爆弾の絵という生々しい形の表現が、何万倍、何億倍と

新しい経験を受け付けない硬直した状態に陥る危険もあります。また、自分の経験から生んだものではなく、親や教師から受け継いだ考えで生きている部分もあります。それは必ずしも悪いことではありませんが、自分の経験とつなぎ合わせていく作業が必要でしょう。

研究会前の吉川先生とのお話から感じましたが、個々の被災者の中にいろいろな経験があると思います。著名な芸術家が被災地を訪れて、それらの経験をつなぎ合わせるようなパフォーマンスをすることは、一般的な意味をそこに見つけていくこととする試みでしょうが、それによって個々人の経験が埋もれたままになる恐れもあります。しかし、個々人の経験を掘り起こす作業は危険を伴います。周到な方法があればいいですけども、掘り起こしかたによれば治療的でない場合もあるという、そういった議論になるのではないかと思います。この辺で私の話題提供を終わりたいと思います。

■生きる力の取り戻し——南三陸町でのアート活動

吉川 由美

二〇一〇年のアートプロジェクト

吉川 皆さん、こんにちは。仙台から来ました吉川と申します。ご紹介を受けましたけれども、宮城県の南三陸町というところで震災前にたまたままちおこしという形でアートプロジェクトをやっております。南三陸は町そのものが丸々一個流出したぐらいの被害で流出度が非常に高いところですが、現在に至るまで支援活動を行なっています。



図7 2010年夏の南三陸

これは流される前の二〇一〇年の夏の南三陸の写真です(図7)。大きく分けて、被災したのは志津川地区、歌津地区、戸倉地区という三つの地区になっています。歌津町と志津川町が合併して南三陸町になりました。これは志津川地区です(図8)。このような古い美しい建物があつ



図8 志津川地区の昔醤油屋だった旧家



図9 志津川地区の上山八幡宮の中に飾られている「きりこ」

す。この辺にはたった一枚の白い紙からこういったものを作る、華がある習慣がありました。

たり、その家の庭はこうなっていて、この後ろに昔醤油屋さんだったところに蔵が並んでいたりします。これは神社のお宮の中です(図9)。私たちが「きりこ」と呼ぶ神棚のお正月飾りです。半紙を二つ折りにして、こういった縁起物を宮司さんが切つて、暮れになると氏子に渡すという習慣があります。右側はお神酒です。左側は巾着です。要は、縁起物ですね。お金が儲かりますように、みんな安泰でありますようにという意味を込めて、いろいろな種類のもを神社、神社で切つて渡します。投網のような「エビスノヘイ」と呼ばれる御幣も一枚の紙から切り出すもので



図10 観光振興の職員たち

資源を掘り起こす活動をしました。

これは全員ではないですけれども、そのときに集まってきたメンバーです。おばあさんはこの家の住人です。この女性たちは半分が南三陸町で生まれた人ですけれども、半分はお嫁にきた人で、この人は若屋で育った人です。鮭漁を営む旦那さんと一緒にいたりしています。

こうやって町の人たちのところに行つて、その家で宝物にしているものごととか、あるいは何か古い時代のエピソードとか、そういうものを短く聞き書きしました。今森先生がおっしゃられた個人的な体験を深く聞くというものはありません。例えば、この家は旅館なんですけど、昔は料理屋さんだったそうです。川のほとりにあって、一番最初に魚市場ができたので、こ

南三陸は観光振興にとでも力を入れていました。一番右端の後列に立っている方が役場の女性職員の宮川舞さんという方です(図10)。彼女が大変優秀な職員で、女性の視点で町を回遊できるような要素を掘り起こせないかということと一年間私が現地に入って、いろいろなプロジェクトをやしながら町の地域

の辺に料理屋と旅館が多いのはそういうわけなんだよという話を聞いたりしました。松月館という旅館です。そういう話を聞いて、みんなでできりこの様式を真似して、その家々のためのきりこを作りました。これは私が作ったもので、松月館ですから、松に満月です(図11)。すぐ前が船着場だったので、船を切り透かしたわけです。

これは一般の女性たちが切ったもので、旅館の女将さんのために考えた、おもてなしの心ということ、手のひらの上にハートが載っているデザインです(図12)。普通の人なのに、これをやり始めたなら、すごく楽しくなったみたいです。これも普通の人が作ったんですけれども、海苔屋さんの焼き海苔のマスコットでのり太郎といいます(図13)。

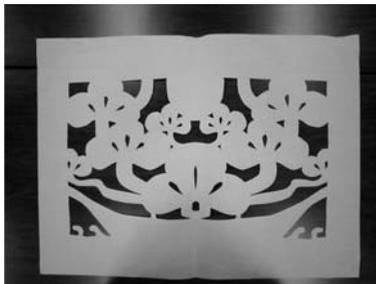


図11 松月館のきりこ



図12 おもてなしの心



図14 床屋の軒先のきりこ

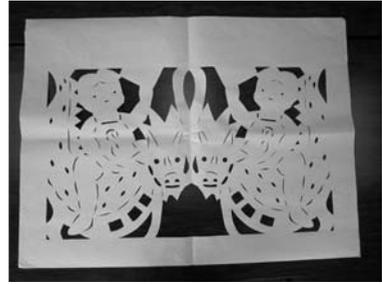


図13 のり太郎



図16 軒先にきりこを取り付ける役場の職員



図15 洋服店のきりこ

これは床屋さんで、これにもストリーパーがあります(図14)。大きな木枠のすごく素敵なクラシックな鏡がついている昭和な雰囲気の木屋さんです。そこのご主人は暇なときに竹で耳かきを削って、お客さんにプレゼントしていたんですね。その物語をここに切ったわけです。

こういったものを二〇一〇年の夏に六五〇枚ほど町に取り付けました。それぞれ「わー、うちのを作ってくれたんだね」ということで町の人が出てきているところです(図15)。これは役場の前につけているところです。川沿いにもこうしてつけました。これは役場の職員の方です(図16)。この人は産業振興課の課長さんです。皆さんも報道で知っていると思いますが、あの防災庁舎の屋上にみんな上って難を逃れようとしたのですけれど、五十三人のうち一〇人しか生き残りませんでした。課長さんも流されて、まだ行方不明のままです。

こうして六五〇枚のきりこを切りました。右側に黄色い紙が張り付けてあるのが見えると思います。こういうふうには、そのきりこはどういう物語なのかを書き出しています(図17)。涼しくなると町の人たちも出てきて、「ああ、このお店でそうだったのか」ということをみんなが共有することができました。

これはウォーキング・ツアーです(図18)。それぞれのきりこを見ながら回って歩くと、店の人が出てきて自分のところの物語を語ってくれるツアーです。これは佐藤仁町長です。この



図18 ウォーキング・ツアー

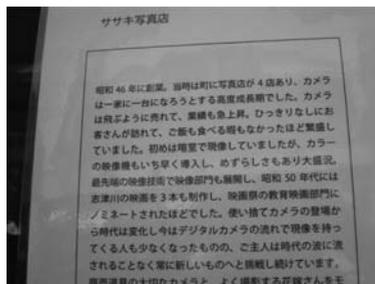


図17 きりこの物語



図20 神棚のきりこ



図19 旧家の馬のきりこ

とき一緒に回ってくれました。町ぐるみで、すごく面白くてかと思えます。

一九六〇年にチリ地震津波というのがありました。長押のあたりまで津波が来て、流された家もありましたが、こういった旧家はそのときにも残ったんですね。数は少ないんですけど、この家は五〇〇坪の敷地です。こういった旧家には地元の皆さんも入ったことがなかったんですけど、このときに入れてもらって拝見することができました。この時すごくうまく行ったのも今考えれば、神様がとにかく最後までからよく見ておきなさいと言われたのかなとも思います。

これはさっきの醤油屋さんで、醤油樽のきりこを切ったんですね。これはその家の本物の神棚にきりこが飾ってあるところなんです(図20)。これは町で一番大きな魚屋さんで、全国と取引しているところです。(図21) 山内社長さんという方が、震災後リーダーとなって福興市をやっています。これは駅前にあるいっせんこ屋というか、トスケ屋さん「くじ引き屋」です(図22)。子どもが正座してくじ引きしているという、とても微笑ましいお店です。大人がくじ引きしたりするのも楽しいと、地域資源を発見して、次の回遊型の観光に役立てていくこうということができますごく盛り上がりました。これは宮司さんがきりこを作るのを見せていただいているところです(図23)。旧家でカフェをやったりしています(図24)。



図22 トスケ屋さん



図21 街で一番大きな魚屋



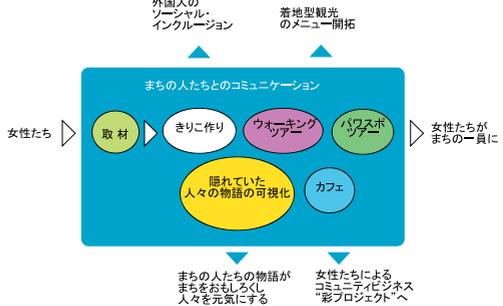
図24 旧家でカフェ



図23 きりこを作る宮司さん

隠れていた人々の物語を町の人たちが共有することで、自分自身が他者に認められる体験になったことだと思っております。そのことが非常に人々を元気づけることになったと思います。それからもう一つは、この町は中国から結構お嫁さんが来ているんです。水産加工業のおつきあひから多いのだと思いますけれども、韓国人、フィリピン人などのお嫁さんがいます。実は、韓国も中国も切り紙の文化があります。中国では赤い切り紙を切るんですけど、秋には中国の赤い切り紙と、白い切り紙を作り、町に飾りました。外国人の嫁さんたちのソーシャル・

表3 きりこプロジェクトのプロセス



この年には、一つのプロジェクトをやることでたっくさんのまちづくりのヒントが生まれましたと思います（表3）。まず一般の女性たちに取材をして、きりこを作りました。そのことで今まで見えなかった、隠れていた町の普通の人の物語が可視化されました。それから、空き店舗でカフェをやったりすることが女性たちのコミュニティビジネスのきっかけになるうとしたこと。その

思います。南三陸町は、美しい自然があるところで、この島に上がっていくと、タブノキという木が群生しています。葉っぱと葉っぱが重ならないので、上を見ると稜線ができるんですね。とても素敵なパワースポットだねということで、パワースポットツアーもやりたいねという話が出ました。

これで元気が出た女性たちが自分たちでアジアン・デイというのを企画しました。中国の切り紙をみんなで切りまして、町に飾り、衣装をつけて、中国の方がチャイニーズ・ティーをご披露してくださいました。これはお茶のそれぞれの特徴を説明しているところですね(図26)。これは韓紙(ハンジ)といって韓国の切り紙です。真ん中は町長さんです。みんなでコスプレして写真を撮ったり、とても楽しかったです。



図25 南三陸町の美しい景観

インクルージョンにもなりました。これをきっかけにして、今も親密につき合っています。例えば大連からお嫁に来た人には、このプロジェクトが第二の人生の始まりになったとも言っていました。これを通して、女性たちが町の一員になったと言えらると思います。

たくさんのことが実現したと



図26 アジアン・デイ

一番手前の彼女は亜紀さんといって、最も熱心に活動した人ですが、残念ながら津波で亡くなってしまいました。ご主人の目の前だったんですが、間に合いませんでした。おなかに四カ月の子どもがいたんですね。とにかく震災で全部流されてしまったので、私たちもあまりまともな写真がないんですけど、ご主人の元に届けました。本当にもうなんとも言えない気持ちで、思い出すだけでも心が痛んで、涙が出てきます。これは自分たちで企画したので、感涙にむせんでいるところですね。(図27)

そのほかにも、「私の美しい南三陸」というアートプロジェクトをやりました。自己紹介して、ほかの仲間たちが自己紹介した人にメッセージを一言ずつ書きます。それを自分の写真のボードに貼り付けて、好きだなと思う景色のところに下げていくプロジェクトです。(図28)これも、この町の風景が全部失われてしまう前になぜこんなにタイムリングよく、と言ったらあれですけども、こういうことがやれたのかなと思っています。彼女は台湾・台北からお嫁に来た人です。さびれた風景がいい



図28 大連から嫁いできた優莉さん



図27 自分たちで企画したアジアン・デイが大成功に終わり、感涙にむせぶ女性たち



図30 防災庁舎 (3・22撮影)



図29 3・22に食糧支援に入った時の南三陸町

と言っていました。

その後、観光にはやっぱり女性を動かさなきゃならないから、みんなでスイーツを作ろうということになって、みんなで企画したりしました。二〇一一年二月二日に報告会をやりました。このように大盛況で、町長さんや観光協会長をはじめとして、一四〇人ぐらいの人が集まりました。彼女たちが取材した物語を朗読し、このきりこのプロジェクトを紹介しました。この年は志津川地区だけだったんですけど、来年はエリアを広げて、歌津地区とか、入谷地区という山側の被災していないエリアもあるんですけど、そちらにもきりこをとりつけないねということで大変盛り上がりました。

三・一一以降の活動

これが三月一日です。さっきの山内さんの息子さんが避難した中学校から撮った画像です。津波が既に入ってきています。志津川地区のこのエリアだけで一八〇〇軒の家が建っていたと言われています。志津川地区は二七〇〇戸のうち二〇〇〇戸が流されています。戸倉地区は六〇〇戸あるうち六〇戸しか残っていません。歌津地区は一四〇〇戸あったうち、七〇〇戸が流されたと思います。

今津波がまさに入ってきているところで、話題の防災庁舎は

これです。この上に避難している人も見えると思います。ここに志津川病院という大きな病院があって、ここにも避難している人が見えると思います。今はつきり防災庁舎の上に人が立っているのが見えると思います。「黄色い砂煙をあげて、バリバリバリって音が聞こえたんだ」と言っていました。手前は気仙沼線というJRの線路です。あつと言う間にこれ乗り越え、何も無い状態です。よくあそこの防災庁舎の上で人が一〇人も助かったものだと思います。

これが次の日です。三月になってこの海辺で雪が降るということはあまりないんですけど、非常に寒かった。これはさっきの山内魚屋さんです。何もなく、こんなにきれいにたたきしか残らなくて、店は数十メートル先にひっくり返っていたという事です。私たちがきりこのプロジェクトをやったこの町並みがこういうふうになったわけです。この島にも鳥居があったんですけど、すっかり形が変わってしまったぐらいやられてしまいました。(図31)

この町では建造物の七〇%が流出して、約八〇〇人の方がお亡くなりになっています。これは避難所の風景です(図32)。

真ん中は山内魚屋さんのご夫婦で、初めてお会いしたときから笑顔でした。彼らの避難所はものすごく優秀で、常に次にどう動いたらいいかということを毎日ミーティングして、食事当番もきちっとできていて、素晴らしい運営でした。

これは先ほどのきりこを作ってもらった阿部旅館という旅館の女将さんです。私が行ったときに、「せつかく来たんだから、泊まっていったらいいっちゃ」と言われました。女将さんなので、避難所にもおもてなししてくれるんだなと思いました。私たちが何かしてあげるとか、物を持っていくとかということよりも、彼らが早く私たちをもてなせる状況、私が喜ぶ状況になるためにお手伝いこそが支援活動だと私は思いました。



図31 形も変わってしまった荒島



図32 避難所の風景

初めは炊き出しとか、ドクターやソーシャルワーカー、あと緩和ケアコーディネーターとかとチームを組んで避難所に入りました。私は緩和ケアコーディネーター養成のワークショップ・ファシリテーターをやっていた関係で、みなさんにご協力をいただくことができました。この膨大な人の数から言えば本当にささ

やかですけれども、お話を伺いました。

彼は及川さんとおっしゃって、このとき初めてお会いしたんですが、「じゃーね」と行こうと思つたら追いかけてきたんです。自分の家は高台にあつたので、家にいるほうが安全だから、自分の母親と奥さんにそこにいると言つて、彼は裏の山の畑を見に行つたそうなんです。それで、気づいたら家ごと二人はいなくなつたわけです。追いかけてきて、そのことを言つて、もう大粒の涙をポロポロこぼされた。周りのおじさんたちは「いーがら思い出させん」と言つていたんですけど、「泣けるんだつたら、今ポロポロ泣いてたほうがいいんだよ」と言いました。

彼が次に言つたのは、「あの神戸の震災のときに仮設住宅に入つて、みんな寂しくて自殺したつて聞いてつから、おれはそういうとこさ入りたくねえ」つて。一人ですから、いつまでもこうやつて仲間にくまれていたいとおっしゃりながら泣いていました。でも、今元氣にしていらつしやるみたいです。

みんな劣悪な状態の避難所で海に流された人を守つておられるんですね。土地も避難所もないので、ほかの自治体に行つていてもらわないと駄目なわけです。だけど、みんなが全然動かない。まだ行方不明者が多すぎて、追悼式もできない。どうしたらいいんだということを立ち話で役場の人たちに聞きまして、これは民間の私たちが何か悲しみを共有する場を作るべきだなと思ひました。というのは、これは五・一一なんですけれ

ど、それまで悲しいとか、涙を流すとか、全く現地で聞かなかつたんです。隣の人がもつと自分より大変な思いをしているからとにかく笑つて頑張ろうというのだけしかありません。天皇陛下が来る、EXILEが来る、毎日お祭騒ぎなんです。これはものすごくよくない状況だなと思ひました。

それで、とにかく今帰らぬ人のいる海に思いを届けることを考えました。町の人たちと相談して、追悼するのではなく「思いを届ける」という言い方をしました。五月なので明るかつたんですけど、私もダウンを着ていますから寒かつたんですけど、キャンデルを持つていたでいて、さっきの山内さんが津波の来る写真を撮つたポイントまでみんなに行つてもらつて、ずっと音楽家の演奏にのせて、歌つてもらいながら、それぞれ思いを届けました。

〈五・一一南三陸の海に思いを届けよう〉の映像〉

ギターと歌声が流れている。

アナウンス 間もなく南三陸町に津波が到達した時間となります。

お亡くなりになつた方々、いまだ海におられる皆様に改めてそれぞれの思いを届けましょう。

中学生たちにはつらかつただろうと思ひます。子どもには本当に申し訳なかつたかも、と思つています。たぶん三分の二の子どもが家を失つたと思ひますし肉親や親戚の誰かを失つている子もいます。だから、後で写真を見てみると、彼女の歌つて

いるのを聞けない子もいました。この時点では、瓦礫の中を歩いて登校しているわけですからね。

ラジオの声 亡くなられた方々を追悼する集会は今後も毎月一日に行なわれる予定です。南三陸町から中継でお伝えしました。

今の人はNHKのアナウンサーです。私は追悼式の演出をさせていただいているんですけども、この曲はいま追悼式でも歌詞を変えて、毎回必ず歌っています。思い出もあるけれど、ここから生きていこうという気持ちを込めて歌っています。

南三陸町の人は非常に明るい人が多いので、南三陸町の人らしい追悼の仕方をとということで、今頑張っている姿を亡くなった人に見せる追悼式にしようということでも今もやっています。これは集団避難先の山側の遠いところの温泉ですが、そこにユーストリーム中継を出して、七カ所ぐらいで中継しています。このことがきっかけになって、住民自身が追悼集会をやったりもしています。

このぬくもりを感じながら初めて海に向き合って、本当につらかったと思いますが、でも一日のたびに海に向き合う時間を作りました。(図33) これは六月ですね。七月ですね。八月で一番海に近づいたんですが、非常に怖かったです(図34)。「怖いな」とみんな言っていました。男の人たちも、私も怖かったですけれど。海を見ながらみんな泣いていました。左側は山内魚店の社長です。八月の時点で彼は、「海に全部持ってい

れたけども、今まで海で生きてきたんだから、海と一緒に生きていくしかないな」と言っていました。でも、役場の人で、



図33 海に向き合う (5月11日)



図34 海に向き合う (8月11日)

「まだ海を直視できない。にくたらしくてできない」という人もいっぱいいました。右側は町長さんです。毎回町長が非公式でおいでになって、いつも泣きながら挨拶してくれました。町長自身も公式には涙を流す機会はなく、ここは非公式の場なので、涙を流すことのできる数少ない場だったのではないかと思います。海で生きてきた人たちなので、だんだん海に近づいて、一人ぐらい海に投げられたりとか。こうやって語り合っていたりしました。

これはアメリカ人のアーティストで「ストンプ」というミュージカルの俳優さんです(図35)。ストンプって体で音を出すボディパーカッションで、そのワーク



図36 Tシャツの販売



図35 ミュージカル「ストンプ」に出演していた俳優のリックさん



図38 全国のアートNPOから送られたきりこは町の総合体育館に展示した



図37 流されなかった神社のきりこ

それからもう一回集まって切り紙を切るワークショップもやってみました。津波の絵柄のものができたりしましたが、こういう明るいものもあります(図37)。なぜか神社は流されなかったんですよ。鳥居は流されても、お宮は一つもやられていないですよ。こういう笑顔のものもありました。私たちの活動を知っている全国のNPOの人たちが送ってくれたものを展示したりもしました(図38)。何かを見せるというのは、あまり効力もないと言ってもいいと思いますが、これは私たち支援をしている人の心を受け止めるという支援になったかなと思います。

ショップをやってもいいました。PTA行事の中でやって、たぶん震災後に自分自身に集中する初めての機会になったのではないかと思います。自分の親と向き合って、自分の身体に集中するということで、彼らはとても気に入ったみたいで、このあと学芸会でも自分たちでボディパーカッションを作って発表したりしていました。

二〇一〇年にきりこのワークショップをやった女の子たちも散り散りばらばらに避難所にいたんですけれども、私たちが作ったTシャツを売ったりし始めました(図36)。自分たちでこういうものを作って売ること、売ってお金を稼ぐというよりは、集まって話をする場ができました。それがとても重要だったように思います。

歌のワークショップ

その後、小学校で四年生中心のワークショップを行ないました。小学校が五つあるんですけども、本当にひどい被害でした。二つの学校を除いて浸水していますので、今も一つの学校に二つの学校が入って勉強している状態です。これは伊里前小学校です。震災後すぐに天皇陛下がこの学校の校庭で海に向かって頭を下げられたところです。これが伊里前のメインストリートで、こちらの山の高台の後ろのところに小学校があります。その一階部分まで水が来ました。これはバイパスです（図39）。ですから道は町内のあちこちで寸断されて孤立した状態になったわけです。



図39 バイパスの高架橋が津波で破壊され落ちた伊里前地区

これは伊里前小学校の四年生です（図40）。みんなで歌を作ろうというので、「大人の人たちも、みんなも頑張ってきたことってどんなことがあるかな」ということを出しました。例えば「少ない食料をやりくりした」とか、「みんなのご飯をみんなで力を合



図40 伊里前小学校の4年生

わせて作った」とか、「水くみを手伝った」とか、みんなが頑張ったことを出したんです。上の「ララソドレシレ」というのは、音符のカードを持って並び替えゲームをして偶然に作ったメロディです。

これは名足小学校です（図41）。もっと海側にある小学校で、ここは全壊して、伊里前小学校に同居しています。



図41 名足小学校の3・4年生

一番被害がひどかったのが戸倉小学校です。既にかんりの子どもが転校していて、男女比もバランスが悪くなっているんですけど、裏山に小さなお宮があつて、先生たちとそこに逃げたんですね（図43）。これが小学校です。完全に水没しました。このお宮の周りは全部海に。このお宮の前でたき火をしながら、四年生以下はお宮の中に入つて一晩過ごしたそうです。ク



図43 戸倉小学校の裏山にある五十鈴神社

子が、「家族に会えたとき幸せと感じた」と言っただけで覚えています。「電気がついたとき」とか、「水が出たとき」と

「一年間本当に大変だったけど、小さな幸せってあったよね。今日よかったなと思ったことがあるよね」ということで、みんなに出してもらいました。たぶんこの子たちが一番この歌を大事にしているかもしれません。一番最初に手を挙げてくれた



図42 戸倉小学校

と教頭先生が、ぜひやってみようがいろいろということ、四年生でやりました。ここは「小さな幸せってあったよね。今日よかったなと思ったことがあるよね」ということで、みんなに出してもらいました。たぶんこの子たちが一番この歌を大事にしているかもしれない。一番最初に手を挙げてくれた

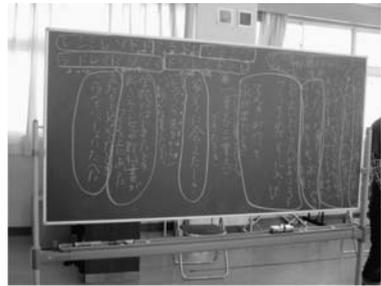


図44 歌のワークショップ

デイを作ったら、この学年はとて面白いメロデイになったんです。これが全部の歌詞です。

「小さいけれど大きなしあわせ」 作詞作曲 戸倉小学校四年生

家族に会えたとき しあわせ

電気がついたとき しあわせ

水道が出たとき しあわせ

友だちとひなんして

ごはんを食べた

自衛隊のおふろに

のびのびはいった

学校が始まったとき しあわせ

ランドセルもらったとき しあわせ

か、「友達と避難してご飯を食べたとき」とか、一つずつみんな出てきました。だから、今でも歌のどの部分が自分の歌詞か、子どもたちはみんなわかっています。僕の歌詞はここにあるとわかってるんですね。それをまとめて、こういうふうに歌詞にしてみました(図44)。同じように並べ替えゲームでメロ

たきだしが来たとき しあわせ

ラーメン カレー かき氷 たこ焼き

牛どん ソフトクリーム

フライドチキン やきいも

エグザイル エーケービー

清原 ジュディ・オング

サンドイッチマン コロッケ

サンブラザ エソラビト

いろんな人に会えた しあわせ

二重とび 三重とび

渡り鳥 とんだよ

鉄棒 マット運動

季節も回ったよ

みんなで がんばったこと しあわせ

明日を生きること しあわせ

ありがとう ありがとう

「自衛隊のおふろにのびのび入ったときにすごく幸せだった」

とか、炊き出しがきたとき幸せだということで、「何を食べたらうれしかったの」と言ったら、「ラーメン」とか、「カレー」とか、「ケンタッキー」とか、「ソフトクリームも来たよ」とか、いろんな人に会えたこと。有名人がいっぱい。EXILEとか、AKBとか、ジュディ・オングというのもあって、「ジュディ・

オング、みんな知ってるの?」と言ったら、全然知らなかったけど、そのとき初めてわかったと言っていました。「ちゃんとここ「II袖」を広げて歌ってくれた」と言っていました。結構韻を踏んでいて、おしゃれな歌詞になっているんです。「二重とび 三重とび 渡り鳥 とんだよ」と。季節の移り変わりもちゃんと入っていて、次は、「鉄棒 マット運動 季節も回ったよ」というところです。

でも、最後の何行かが時間の中でできなかつたんです。五月一日に新学期が始まったのでカリキュラムが終わらない状況で、本当にタイトな時間の中で、私は二時間しかもらえませんでした。二時間でこの曲を作ったことがもう信じられないんですけれども、このクラスに難病で盛岡の病院に入院しているお子さんがいました。K君というんですけれども、最後のところは、「先生、K君にお電話して、小さな幸せは何だったか聞いてもらえますか」とお願いしました。このクラスは先生も陸前高田のご出身で、おじいさんとお父さんが津波で流されたのかな。やっぱり被害が同じところに集中するんですよ。

その難病のお子さんに電話をかけたなら、「明日を生きることが幸せだと思う」と言ったらしくて、お母さんがとてもびっくりしていました。「たった一〇歳の息子が、明日を生きることが幸せだと言ったことがとても信じられなかった」と先生からメールが来たとき、私も本当に涙が止まらなかったですね。

全部聞くと一五分くらいかかってしまうので、部分的にお聞きいただきます。五つの学校で五曲の歌を作りました。最初は名足小学校です。自分の学校の自分の住んでいたところがどんなふうになれるか、どんな美しいところだったのか、みんなで思い出そうと言って、作りました。

「しあわせなみんなのまち」 作詞作曲 名足小学校三年一組・四年一組

海がキラキラ けしきがきれい
緑がいっぱい 桜もさいてた

やさしい人がたくさん住んでる

お年寄りはとても元気

ネコもいる

子どもなのにお年寄りのことを言っていたり、「ネコがいる」というところが子どもらしくていいなと思います。次が、先ほどの伊里前小学校で、頑張ったことを歌にしたものです。ここはフルコーラスで聞いてください。

「ファイト！南三陸」 作詞作曲 伊里前小学校四年一組

水くみ 手伝った

支援物資 運んだ

みんなのごはん 作った

みんなががれき かたづけ

少ない食料 やりくり

がれきは重い

水も重い

みんなで力合わせた

仕事場なくなった

負けずにお店つくった

がんばり働きたした

流れた船 ひっぱった

シロウオ サケ とった

ホヤ カキ ワカメ

種を入れた

みんなで力合わせた

「みんなで力合わせた」で「クレッシェンドするところがいつも泣かせるなと思うんですけどね。これは最後の戸倉小学校の歌です。これも一部です。

「小さいけれど大きなしあわせ」 作詞 作曲 戸倉小学校四年生

家族に会えたとき しあわせ

電気がついたとき しあわせ

いろんな人に会えた しあわせ

二重とび 三重とび

渡り鳥 とんだよ

鉄棒 マット運動



図45 震災から一年の追悼式 撮影：浅田政志

季節も まわったよ

みんなでがんばったこと しあわせ

明日を生きること しあわせ

ありがとう ありがとう

ありがとう ありがとう

震災から一年の三〇〇人ぐらいの遺族の方が集まっている追悼式だったんですけど、スタッフも私たちもみんな泣きながらこの曲を聴いていました(図45)。町の人たちが家と仕事場と公共施設のすべてを失っているの、とにかく流出度が激しいんです。神戸だったら、全部失った方もいらっしやると思いますが、職場が大阪にあつて職場だけはあるというパターンの人も多かったと思うんですけど、この町においては、家も会社も工場も公共施設もみんないっぺんにはないわけです。だから、本当にどこから立て直したらいいのかわからない状況の中で、子どもたちがみんなが一年間頑張ったことをちゃんと讃える歌を作ったことはすごくよかったのではないかなと思います。

「この場に子どもを連れていっ

ていいのか」という議論からありました。それから、「歌がそんな二時間やそこで作れるわけがないだろう。私は音楽教育三〇年間しているが、作曲コンクールに出す曲を夏休みからやっているけれど終わっていない。そんなのはできるわけないだろう」と怒られました。歌ができた瞬間にたぶん先生方は、追悼式に集まった人々の心に前向きな気持ちを届けられるということを確信しておられたのではないかと思います。山側の被災しなかった学校の先生は、この場にきて初めて何が起こったかがわかったのではないかなと思います。

一番うれしかったのは戸倉小学校の話です。この時期になるとものすごく津波の映像がメディアで流れますよね。南三陸ではあまりテレビを見せないようにいつも注意をしているんですが、でもやはり目に入るので、一周年に向けた報道攻勢でみんな具合悪くなったらしいんですけど、このワークショップをやった四年生はその時期もみんな元気に過ごしたんだそうです。戸倉小学校の先生方からその話を聞いて、私はすごくうれしかったですね。

頑張ってきた自衛隊の人も参列していましたが、この戸倉小学校の「自衛隊のおふろにのびのび入った」という歌詞で号泣していたらしいです。自衛隊の人たちも相当PTSDになっていると思いますが、記憶をポジティブに整理して、もう一回引き出しのしにしようという意味では子どもたちの声と歌は本当



図46 瓦礫の片付いたエリア

に素晴らしいものだったなと思います。本人たちは全然あつていなくて、何が起きているのかはわかっていないと思います。でも、二分の一人成人式を迎えた、一〇歳の子どもたちなので、先生方は「彼らが二〇歳、本当の成人式になったとき、もう一回集まってこの歌を歌いたいね」と言ってくださいました。先生方のほうがこの歌が寝ても覚めても心から離れたかったらしく、いつも教室で泣きながら練習してくれたそうです。

これがあの一八〇〇軒の家があったエリアです。何もありません、今も全く変わっていない(図46)。瓦礫はきれいに片づいてはいますけれども。

二〇一二年のきりこのプロジェクト

この夏、もう一回きりこのプロジェクトをやりました。今生き残った人たちにもう一回話を聞いて、前のきりこのデザインも復刻しながら、新しいものは新しく取材して、仮設商店街に



図47 電気屋さん

掛けました。

これは電気屋さんです(図47)。ハイジという白い猫がいたんです。避難するときにハイジを二階に上げて、餌をいっぱいあげて、しばらく来られないかもしれないからねと鍵をご丁寧に掛けて避難した。当然全部流されたわけですね。店のそばにラベンダーの大きな株が咲いていたというので、この団子みたいなのはラベンダーです。電気屋さんの仕事道具のペンチをハイジが持っている絵柄ですけど、ここの奥さんに「ハイジだよ」と持っていったら、やはり泣いていましたね。

こういうふう記憶を切り紙にして、紙を飾るだけじゃなくて、右側にありますけれども、アルミ複合板の看板にしています。これは歌津のほうです。歌津では二〇一〇年に、きりこのプロジェクトをやっていないのでこれしかないんですけれども、志津川地区のほうは流された家の跡地に、それぞれの家の物語を切った、あるいはいま生きている人の姿をコメントにして、こういうふうにも展示しています。

本当は八月二五日にこれを飾って、九・一一が終わったら撤

収する予定でした。流されて何もなくなった跡地にこういったものを立てていいのか。法律上許されるのかとか、いろいろなことを考えました。被災地はすごく不満が渦巻いていますから、「こんなのを立てやがって。誰が立てたんだ」とすごく怒られるのではないかなとも思いました。でも、一周年が終わったあたりから、みんなが自分が生活してきた土地を見ようとしなくなりました。つらいんでしょうね。草ぼうぼうで、「瓦礫がいっぱいあって、無残な自分の土地をもう見たくないという思いがあったと思うんです。本当に四月、五月に、このままではチリ地震津波から復活してきた自分の家の先人たちの記憶みたいなものも全部なくなってしまうのではないかと心配になるようなことがいっぱい起こりました。緊急雇用のお金がばんばん出てきて、みんながすごく忙しくなってきた、もはや過去のことを振り返らないようにしたいというような感じがあって、これはすごく危険だなと思いました。

それで、ぎりぎりまで迷って、七月にこれをやろうと思って、町の人に「やってもいいかな」と聞いたら、「おお、やってける、やってける」と言われたので、一軒一軒もちろん確かめて、六一枚のパネルを立てたんです(図48)。今のは山内魚屋さんのお店があった跡地に立てたきりこボードです。先ほど言ったように、山内社長は福興市のリーダーで、本当に笑顔を絶やしたことがないんです。そして、一番最初に「おれたち海ととも

に生きてきたから、海とともに生きていくしかねえよな」と言ったので、あの言葉は私が書いて、ああいうふうに変えてしましました。

山内さんで日本酒の商品を出されたんですけど、そのラベルが私が作ったきりこのデザインになっています。これがお酒の商品として仮設商店街で売っています。

これはさっきも言った五〇〇坪の古民家です(図19・49)。五〇〇坪で昔馬場があって、すごく広い敷地だったんです。この女主人は流された後に一生懸命ヒマワリの種を蒔いていました。それで「この家の庭にヒマワリの種を蒔きました」という言葉を掲げました。九・一一にこのエリアで海に向けて、「南三陸の海に思いを届けよう」というコンサートをやりました。巨大なスピーカーを置いて海に歌を届けたんです。そのときまでにヒマワリが咲けばいいなと彼女は思っていました。この家ですね。中にはこういうふうに大きな神棚があって、彼女は一〇〇畳敷きに一人で寝ていたと言っています。こういう素晴らしい庭があって、奥に蔵があったり、大きな栗の木があったりしましたが、何一つ残っていません。ヒマワリはちゃんと咲きました。

これは阿部旅館さんです(図50)。旅館は廃業することにして、女将さんは流された着物を拾ってきて、洗って、仮設で吊るし、雛を切っています。この旅館も一五〇年ぐらい続いた旅



図50 阿部旅館



図48 各家々の方たちの姿を、海に届けようとすべてのボードを海に向けて展示した



図51 松月館



図49 古民家跡地

館なんですけれども、廃業しました。これは松月館です（図51）。「船と人でにぎわった町の記憶を未来へ」としました。

それから、青いTシャツを着た人が衣料品店の旦那さんです。彼の奥さんがここが私のふるさとだからと言ったので、ああいうふうに切りました。この方たちは泣いて喜んでくださったって、さりが立ったことを、「家が建つよりうれしいってば」と言っていました。斜め向かいに一個だけ立っているところがありませんが、ここは障害者の息子さんともう一人の弟さん以外、家族が全員五人亡くなったんです。「家族がみんな亡くなったから、あの家にもさりが立ててける」と泣いて頼まりました。生きている人の姿を空に、海に見せようと思ってやったプロジェクトなんですけど、あそこだけは亡くなってしまったんだけど切りました。そうしたら、一昨日、私、お寺に行ったら、五人のお骨がたまたまあって、ああ、ご縁だなと思って、また涙が流れました。

さっきの伊里前小学校で子どもたちとさりが切るワークショップもやりました。例えばこの子どもさんはばあちゃんのためにヒマワリを切りました。「震災のときはあちゃんのお母さんが流されてしまったので、大きくて明るいヒマワリを作りました」とコメントにあります。もともと自分の家の神棚にさりを飾っていた家が三分の二以上、四分の三ぐらいいるんです。だから、



図53 災害ボランティアセンターへの住民の要請でできりこを展示してあるエリアの草刈りが始まった

ら一〇〇人態勢で炎天下に草刈りが始まって、こんなにきれいに草刈りしてもらいました(図53)。みんな喜んでいました。九・一一にさきほどお話しした、コンサートと朗読をやりまして、この模様は災害FMのご協力で町内に流していただきました。とにかくそれ



図52 雑草が生い茂る志津川地区 8月下旬

学校でできりこを切るとなったら、お父さんが絵柄を書いて持たせてくれた家もありました。こういうものを夏に立てましたが、私たち、草刈りもちょっとして、できりが隠されないようにやっただけですが、草ぼうぼうで駄目なんですよ(図52)。そうしたら、町の人が災害ボランティアセンターに「このエリアの草刈りをしてける」と要請してくれていたのです、次の日から一〇〇人態勢で炎天下に草刈りが始まって、こんなにきれいに草刈りしてもらいました(図53)。みんな喜んでいました。九・一一にさきほどお話しした、コンサートと朗読をやりまして、この模様は災害FMのご協力で町内に流していただきました。とにかくそれ



図54 家々の基礎の解体

この後、家々の基礎の解体が始まりました(図54)。ここは神戸だから、こういうのが駄目な人がいるかもしれませんが。この間、この写真を見てすごく具合が悪くなった人がいるので気をつけてください。基礎を解体すると、もうどこが私の家か全くわからない状態になるわけです。ここを高上げするので、別に基礎を解体しなくてもいいらしいんですけども、とにかくお金の出方が目茶苦茶なので、土建屋さんも首をひねりながら

それに海に思いを届けるという会なので、誰に話すこともなく、音楽を流して、町の人たちが頑張ってきた物語の朗読を時々挟みながら、皆さんにお聞かせしました。この人は膳場貴子さんです。一日というとにかくマスコミがすごいんですよ。でも、なんだかとおちんかんかな取材をしています。膳場さんの取材はとても適格でしたが、マスコミのニュアンスのずれた報道のためにトラブルが起ることがあります。社社の宮司さんがそれぞれのきりこの写真を撮ってくれて、一カ所一カ所で和歌を詠んで、私に送ってくれました。本当にうれしかったです。



図55 満潮になると設営したきりが水に浮かぶように見える

やっているという状況です。これでどんどん基礎が壊され、更地になっていきました。大潮になると浸水するので、道路だけ嵩上げします。(図55)今、こういうふうになっていきますので、きりがなくなったら、どこに誰の家があつて、店があつたかわからないんですよ。今年は暴風警報が多く

て、三日にいったべんは暴風なんです。こんなおんぼろのボードなので、しょっちゅう飛びそうになったり、壊れたりしているんですけれど、基礎の工事で単管パイプを建ててくれた土建屋さんの社長が、風が吹いたら全部見回って、毎日のように補修してくれました。社員も補修してくれました。役場の人や町の人たちも、これがなくなると自分の町がわからないということ、今は志津川地区の風景になっていきたいと思います。

この間もお話したところ、流出地区にはもう住まないことが決定しているので、嵩上げが終わったら公園にしたいとかいろいろやっていますが、とにかく国の法律というのは、阪神・淡路大震災のときもそうだったと思います。元に戻すことにはお金が出ません。しかも公園を作るには人口に対して何へ



図56 満潮のときの写真

クタールという比率で決まるのだそうで、その地域に人が住まなくなっているのが公園にする金も全く出ない。だけど、町の人とは、このきりがちゃんとして立派な形であつて、家々のストーリーがもつとたくさん読めるようになつていって、さっきのタブノキは塩害にも強いので、タブの森があつて、椿の木をたどつていくと高いところに逃げられる、そういうふうな町になればいいねとみんなで言っています。期せずして、精神文化を町の再生に生かすという意味で、内発的な町のグランドデザインに非常に寄与しているという実感があります。これは二月十三日に海側から撮った写真です(図56)。基礎のなくなつたら、ろにきりこだけが立っているわけです。あれがなくなつたら、もう本当に人が住んでいたとは思えないような場所になつていきたいと思います。

チリとの交流

私は昨日までこのプロジェクトをしていました。マスクをし

ているのは、疲れて夕べ熱を出したからです。私はここまで、いかに住民の人が主体になれるか、私たちのやったことであっても、それがいかに住民のものになるかということだけを考えた。こういう活動をしてきました。町の人にはきりこを切る暇も全くありませんでしたので、いろいろな協力者、女子美の先生とか、友達にも頼んでこういったものを作っているんです。それは今、町の人ができないから、「大丈夫だよ、代わりに私たちがやっているから、できるようにになったら戻っておいで」という気持ちでやっているし、言ってもいます。

このきりこが、みんなが「取らないでくれ」ということから残るようになり、期せずして、町のグランドデザインの青写真が描けるところまで寄与している。そこに、みんなのものになってきたんだという実感がすごくありました。さっきの子どもたちの歌もそうです。みんなが自分自身がそこまで頑張ったことを誇りに思えばいい。ご先祖様のときも流されたけれど頑張つて復興したんだから、われわれにもできる。そういうふうに住体的に思えることのみをやってきました。

でも、チリ地震津波で友情を育んできた地球の真反対のチリという国と交流するという事業は国際交流基金に依頼された仕事として携わったんです。非常につらかったです。チリは二〇一〇年二月二七日にマグニチュード八・八の大地震が来ました。この町はコンステイトウシオンといいますが、高さ一五メートル

ルの津波が来た町です。この町の高校生と南三陸町の志津川高等学校が詩と歌を作って交換するプロジェクトをやるということとで高校にお願いに行きました。

このプロジェクトを受け入れてもらうことにはなったものの、毎回スクールバスでみんな通っているのに、スクールバスが出るまでの放課後の一時間しか時間が与えられないんです。私、ワークショップを一時間でやるというのはやったことがないというか、ちょうど盛り上がったところでぶつと終わるので本当につらかったですけれど、被災直後からの自分自身を振り返って、自分を何かに例える、あるいはそのときに焼きついている風景を書き出していくというところで詩を作りました。

それと同時に、子どもたちと一緒に、音符を並べ替えるゲー



図57 志津川高等学校

ムで旋律を幾つか作りました(図57)。そして、友達がどういうことを書いたか付箋で確かめ合つて、みんなの考え、みんなの思いを共有しました。クラス全員で書き出した言葉を並べ替えて構成しました。同時にチリの高校の皆さんに自分たちの夢を伝えようということで、それも詩に表しました。それがお手

元にある「はるかな友に心寄せて」という詩集です。後でご覧いただければと思います。

あちらの学校は必ずしも被災した子どもたちばかりではないので、被災した人たちにグループでインタビュウに行つたそうです。インタビュウしたものを主語を小犬に例えたり、被災した、例えばエミリオさんだったらエミリオさんに例えて、その人を主語にして、その人の被災したときの物語を書くということとで作文が七つ送られてきました。

長い詩を短く構成し直して、子どもたちの旋律をとつて、「春」「夏」「秋・冬」「今そして未来へ」「夢」という五曲の組曲を作りました。これはチリに送つたメッセージビデオです。チリはスペイン語なので、スペイン語の字幕がついています。

「青い空、青い海がとてもきれいな母の海がありました。三月一日の一四時四六分に地震が来て、一六メートルの津波がきました」。これは被災直後の町です。「七〇%の建物が流出しました。八〇〇人の人が亡くなりました」。これは防災庁舎ですね。

〈ビデオ〉

高校生の歌声が聴こえる。

男子生徒 やっぱり震災からつらいことかたくさんあった中でも、うれしかったことか、そういう全部含めて歌詞に乗せて。

女子生徒 同じ経験をした同世代の人つて、なかなかないと思う

んですよね。だから、そういう貴重な体験も共有できたらなと思いました。自分だけだと感情を押し殺してしまう部分もあるので、その解き放てる感じがよかったと思います。

男子生徒 こんにちは、志津川高等学校二年四組です。今回チリの皆様と交流することができて、非常にうれしいです。

女子生徒 皆さんの詩を読んで、私たちと同じ思いをした人が地球の裏側にもいるのだなと思いました。

男子生徒 今南三陸町は少しずつですが、復興へ向けて全力で頑張っています。

女子生徒 みんなで一緒に頑張りました。

全員 頑張りました。グーグー。

というのを現地で見ました。これがガブリエラ・ミストラル校です(図58)。向こうの高校生のコメントです。

〈ビデオ〉

「ガブリエラ・ミストラル高生徒のスペイン語のコメント」

この子は民宿をやっている家の子で、全部流されてしまったんですね。私たちはこの子の家に泊まりました。この日の夜にコンサートがあつて、夜中の追悼コンサートがありました。チリは詩の国だなどつくづく思いました。志津川高校のコメントと比べるとお恥ずかしい限りでございます。

これはコンステイトウシオンの町です(図59)。町中は元の姿が全然残っているんですけど、やはり海辺のほうに行く



図59 コンステイトゥシオンの町



図58 ガブリエラ・ミストラル高



図61 追悼式での演奏のあとケコさんとハグする高校生たち



図60 サンティアゴでのコンサートの模様

なくなっているところがあります。午前〇時半に日本から連れていったアーティストたちがコンサートを行ない、志津川高校の歌を届けてきました。ケコ・ユンゲさんという向こうで大変有名な歌手だった人がNGOで被災地の支援をしていて、夜の一二時半から四時ぐらいまで子ども先生もみんないらっしやって、コンサートを行ないました(図60)。それから、首都のサンティアゴでもこのようにコンサートが行なわれて、南三陸の高校生たちのメッセージを伝えてきました。

また被災地に行つて、歌のあるひとときを共に過ごしまして、「南部牛追唄」をここで歌つたら、この彼女は今パーパターオルを取ろうとしていますけれど、みんな涙が流れて、涙を拭こうとしているところですよ。東北の作業歌がすぐこの人たちに伝わったかなと思うと、とてもうれしかったです。あとはケコさんが有名人なので、みんなすごく喜んでいました。

これは最後のミーティングです。今日、まだ映像が私の手元に来ていないので、ないのですが、素晴らしい演奏をしてくださいました。時間のない中で、正直、無理やりやらされている感じを持った子もいると思うんですね。その中で追悼式典に行つて、そこで町長さんの式辞を聞いて、志津川高校の作った歌が町の人たちに大切なメッセージを伝えているということをつたぶん彼らは実感したと思うんです。

翌日の交流コンサートです。彼女たちは志津川高校の三年生

なんですけれども、こちらのお子さんはお母さんが流されているんですね。それでこれはガブリエラ・ミストラル校の曲を演奏するときに、向こうの高校生が語るところを日本語に訳して彼女たちにやってもらいました。大丈夫かなと心配したんですけど、素晴らしくやってくれました。ケコさんたちと交流して、本当に満足してくれたみたいなので、彼女たちの視野が広がって、世界にはいろいろな人がいて、いろいろな世界があるんだとわかるだけでも次に行く力になったかなと思います。志津川高校の生徒も、これから記録をもう一度反芻することで自分たちが何を成し得たかということをつぶし確信していくだろうと思っています。

最後の日、昨日ですけれども、漁師さんのところに行ったらちょうどメカブの収穫をやっていたんですね。民謡歌手が一緒にユニットに入っていたので、ここで「斉太郎節」を歌ったら、もうみんな常に歌っているのです、すぐ掛け声が出ました。

「前は海、後ろは山で」という民謡の歌詞が、海のそばで歌うとリアルだとわかりました。ここは水戸辺地区というところで、行山流水戸辺鹿子躍しむらびをやっているところです。集落全部がなくなっただけですけれども、今映っているこのリーダーの人が鹿子躍をいち早く復活して、五月の連休には避難所で踊っていたんですね。全部流されたのに鹿子頭だけあったらしいんです。避難所の布団の布を使って、衣装を作っていました。

今回の高校生のプロジェクトはいろいろな人の立場を考えたわけではないかもしれません。私も初めて、被災者のことだけを考えるのではなく、この事業をやった国際交流基金の人やチリの人や大使館の人の満足も考えなければいけないというので、本当に大変でした。たぶん今後アートの支援していくときに、私が今回感じた大変さをクリアしないと、被災者が自分自身の体験としてこのプロジェクトを受け止めることができるようなプロジェクトを行うことはむずかしいのではないかと思います。だから、今後の被災地でのアートを通しての支援ということに関しても、支援をしてくださる事業を作っておられる各セクターの皆さんとも、事業を始める前にどういうふうにやっていくべきか考えていかないとならない。そうしないとコーディネートに入る人間が両者の間に入ってつぶれそうになります。チリ側のアーティストが作った曲はポップスのようなアレンジの曲で、太鼓のビートがきいた曲でした。向こうで聞いていて、追悼式典にこの曲が流れたら、「なんで追悼式にチリが関係あるんだ」と怒鳴られてもおかしくないと思います。追悼式典でチリとの交流で歌を交換しているということが、町の人にとっての必然になるように文脈を作っていくかなければいけない。本当に私自身がつかったです。私自身がPTSDになりそうな感じでした。明日報告会なんですけどね。

まだ今ちょっとげんなりしていますけれども、でもそれもい

い体験だったかなと思います。やはりそっちの方向じゃ駄目だということを確認して、とにかく元のスタイルに戻ろうと確信しております。すみません。すごくオーバーしましたけれども、私の話を終わらせていただきます。ありがとうございます。「拍手」

司会（石谷） ありがとうございます。お話の中で、いかにアート活動が記憶に向き合えるのかということがありましたし、歌を作ったり、きりこを作ったり、場所の記憶を語るという活動自体が、PTSDの問題を扱うのかそうでないのかということとを特別意識しなくても、自然に予防になっているという印象を受けました。

さらにきりこを海岸に立てたときに、それが町の人にとって意味のあるものだけではなくて、工事などで町にかかわる人々も意味のあるものとしてとらえられていく。そこにまさに公共化というものをどのように考えたらいいのか、あるいは町が新しく出発するときには町のランドデザインをどのようにとらえていったらいいのかという非常に本質的な問題もあつたかと思えます。

吉川 追悼式典にいらっしやっているんですか。

福田 はい。

吉川 チリの音楽が出てきたとき、大丈夫でしたか。違和感が

ありませんでしたか。

福田 福田雄と申します。そうですね……。少し字幕が見にくかったのですが、なかなか文脈が掴みづらかったところがあるところですが、高校生が声を合わせて歌っているところに心にくつと来るものがありました。

吉川 ありがとうございます。

司会（石谷） さらにチリとの交流ということも含めて、非常に国際的な広がりを持って、似たような災害体験をどのように共有していくのか。地域から世界へという大きな広がりもありました。ただ、支援者側としては、大きく広げるときにコンフリクトというか、気苦労なども強く感じられたというお話だっと思います。

■問題提起と討議・質疑1

司会（石谷） 話が盛り上がって参りましたので、私からの話は討議のあいだにさせていただきますが「セラピストとメディアエーター」というお話を用意しております。まず簡単にメディアエーター（調停者、媒介者）という言葉を紹介しておきます。ヨーロッパでは、たとえばマニフェスタ・ビエンナーレというのが行なわれており、その中でアートの解説を行うエデュケーターの役割の人を指すのにメディアエーターと言う言葉が使われ

表6 あなたはどんなアート・メディエーターですか (抜粋)

<p>A. 内在的 (Intrinsic) アート・メディエーションは芸術と文化についての知識を伝達することに関わります。視覚芸術は、その固有な領域の外側の教訓的で道徳的な目的に依存しない内在的価値を持っています。アート・メディエーションは、鑑賞者が展示された芸術作品とふれあうことができるようにするための、背景となる知識、分析ツール、適切なコンセプトを補うことで、訪問者の美的経験に寄与することができます。</p> <p>B. 構成的 (Formative) アート・メディエーションは、芸術から学ぶことに関わります。芸術との交流は、多くの異なるレベルでの個人の成長の刺激となります。それは、わたしたちが自分をとりまく世界を見るやり方と、わたしたちが自分を見るやり方に影響を与えます。それは社会的発展、すなわち、たとえ人々が複雑さや変化にもっとうまく関われるよう備えることに貢献できます。</p> <p>C. 参加型 (Participatory) アート・メディエーションは、すべての人に芸術と文化へアクセスできるようにすることに関わります。芸術、とりわけ多くの施設で提示される「ハイ」アートとわたしたちが見なしている芸術は、社会的差異の道具としてつねに作用しています。アート・メディエーションは、社会的差異のギャップに橋を架けることに寄与することができます。それは肯定的な社会資本を創造することができ、社会的孤立を減少させ、異なる文化の理解を促進することができます。</p> <p>D. 批評的 (Critical) アート・メディエーションは、施設が展示するやり方そのものと同じく、訪問する観客にも密接に関わります。芸術教育の役割は、芸術作品と鑑賞者とのあいだの相互交流を問題化するとともに、アート・ワールドが状況を規定している施設の役割をも問題化し、批評すべきです。</p> <p>E. 変化させる力をもつ (Transformative) 芸術とアート・メディエーションは、社会変革を促進するためのツールです。芸術家とアート・メディエーターはあらゆる他の知の領域との連携を築くための責任があります。特殊な形態としての、あるいは、人間の思索の表現としての芸術は、経済、科学、宗教、政治のような活動に関わるユニークな貢献をします。</p>

ています。その団体がメディエーターの育成のために用意した「あなたはどいうタイプのメディエーターですか」という質問紙があります。(www.manifestaworkbook.org/whalkind.pdf)

現代アートは、芸術作品を鑑賞することから、それだけでなく、芸術を使って社会的にアクションを起こしていくこと、非常に幅広いものになっています。このアンケートに答えていくと、最後に五つぐらい、いろいろなアートの傾向が出てきます(表6)。皆さんのアートに対する見方、あるいはかわり方が浮かび上がってくるようなアンケートですので、ぜひ答えていただいで、どんなタイプの活動に皆さんが関心をお持ちかということも考えていただければと思います。

森先生からはセラピー的な取り組みの一環として物語を語っていくというお話をいただきました。一方、吉川さんからは、どちらかというセラピーということをあまり意識しないけれども、心のケアだったり、地元の人たちの連携だったり、あるいは過去と一緒に培ってきたことをどうやって思い起こしていくのか、その時に一緒に何かをつくってみるときに言葉や物語が語られはじめるといったお話が聞けたかと思えます。セラピー的なものと、あるいはそうではないアートの活動はどのように関わってくるのか。あるいは、その時どんな人材が動けるといのか。そういったことも考えていければと思っています。

まず、森先生から吉川さんにコメントをいただきます。

森 どうもありがとうございました。石谷さんから間接的に少し聞いていただけで、このような詳しいお話は初めて伺いました。大変感銘を受けました。心理療法の視点から考えましたところをお話しします。

私のお話ししたような自伝的な記憶の整理の中では、最終的に一貫した人生史、英語で言うところの「coherent」な人生史を形成することが目標になります。できるだけ肯定的な意味を持った一貫した人生史を形成できることが大事だと思います。トラウマ的体験は人生史を体験前と体験後に分断してしまつて、両者があまりにも違つてしまつて、その二つを自分の人生としてつなぐことが難しい。そのあたりが一つの問題ですね。

そのために、私がお話ししましたような体験そのものを治療的に扱う方法もありますが、吉川さんの活動がある意味奇跡的なのは、一年前の夏に既にこの町に入つておられて、地域の記憶を掘り起こす活動をされていたことです。地域とのつながりがあった吉川さんが震災後にその方法をもう一度用いて過去の記憶と現在の場所をつなげていった。それぞれの方々の過去の人生と今の人生をつなぐ、その作業をきりこみという媒体を通してされたという印象を受けました。もしこの活動がなかったら、過去のことは忘れない、見たくない、という形で分断されたままで、それをつなげる作業は大変難しい作業として将来に

残されたと思います。一年前の夏に一度行なわれていたおかげで、過去の体験とつながることができたのは本当にまれなことではないかという気がします。

震災の体験そのものには触れないで、それぞれの体験を拾い上げてつなげることで、人生史の継続性ができた結果、将来、いつかトラウマ的な部分を扱える方も出てくるのではないかと。それがどんな形でどういうふうに使われるのかは個々人で違つかもしれませんが、その素地を作っているように思えます。しかも、地域に根ざした幅広い、かつ深いレベルで素地を作っている。それが私の一番感じたことです。とりあえず、ここまでとします。

司会（石谷） 奇跡的と森先生がおっしゃられましたけれども、私も最初にお話を聞いたときに、非常にまれな例であるけれども、説得力というか、必然性があった活動だったのだらうと感じた部分がありました。ある種の防災的な役割、予防的な役割は、常にそういう活動を続けることによって力を発揮するのではないかという印象もあります。

吉川さんから森先生のお話などについて、何か感じたことだったり、思ったことがありますらお願いします。

吉川 実際に学校先生とは非常にもめているわけです。何人かの先生は「本当にそんなところ」「追悼式典」に連れていったいいのか」とか、「いったいこんなことをやって何になるん

だ」と言われました。だけど、管理職や教務主任や担任の先生でみんなて話し合うことで、「いや、そうじゃないんじゃないか」と先生方の意見も侃々諤々何えたのはよかったと思います。

ただ、その時点では、本当に曲らしくなるのかとか、本当に大丈夫なのかとか、何の確信もなかったし、また、観客はみな感動の涙を流す結果に終わることができたけど、いったいこのことが町民にとってよかったことなのか、本当に肯定できることなのかという確信もなかったんです。専門知識もないので、よくわからなかったんです。悪い方向ではなからうとは思っていましたが、今日、森先生の先ほどの講演と今のお話を聞いて、私はとても安心しました。あのようなやり方をそばでずっと見守ってくれていた担任の先生たちが、この震災に対して子どもの向き合い方をどういうふうに持つていったらいいのかという一つの参考にもしていただけたかなと思っています。大人なので、先生方のほうがすごく感動して、涙を流していたわけですね。

ただ、問題は、まず被災後に宮城県は人事異動をやったんですよ。クラスの子どもの親がいるのかいないのか、例えば亡くなった子どもの家がどういう家なのかも不明になっている状況ができてしまっていた。すごく批判されたんですけど、被災した学校にとっては、全員が被災したままだとつらかったと思う。新しい先生がいらっしやったことで職員の気持ちが楽になっ

たともおっしやっていました。「二〇一二年の」三・一一を終えて、そこでまた人事異動があつたんです。被害がひどかったところの教頭先生か校長先生は必ずチェンジしているんです。みんな辞めたくないとおっしやっているんですが、やはり労務災害的ないろいろなことを思うんでしょうね。

きりこのワークシヨップをすべての小学校で、引き続き伊里前小学校みたいにやったほうがいいと思つたんです。風景が失われた町で瓦礫のところを通っている子どもが将来的に自分のふるさと思ひ出したときに、あの光景ではあまりにも殺伐としているのではないかと私は思つたんです。それで、きりこのワークシヨップをしながら、「町のあそこにごういうことがあつたね」とか、「ごういう人が頑張つたね」とか、ごういうことが共有されていくことによつてすごくいい体験になっていくかなと思つたんですけど、学校にワークシヨップをやらせてもらえないかと頼みに行つても、トップが移動しているためにこれまでの活動実績の文脈がつかないんです。どこの馬の骨かわからない私が、「きりことごういうワークシヨップをやつてください」と言つても、「先生が」違う地域から来ているから、きりこを知らないわけです。それで、「なんかスタンフォード大学が来ていて、忙しいんだよね」とか言われて断られる。銘柄で、吉川よりスタンフォード大学だよなという感じなんです。地域の誇りを育てるような教育の方が大切なのではないかと感じて

います。

司会（石谷） 小学校にはスクールカウンセラーがいるかと思いますが、心理職の人との連携は実感としてはどうでしょうか。吉川さんが活動していて、必要だものすごく感じられるものでしょうか。

吉川 ワークショップをするときにですか。その前の年にこのワークショップをやった先生たちは、すごくやりたいわけですが起こるかわかっているから。でも、よその人を入れるには校長の許可がないと駄目なので、校長が駄目と言ったら駄目なんです。なので、校長が代わったところでは教頭先生は前の年に一緒に走っているから、すごくよくわかっているんです。「申し訳ありません」と謝られる状態でした。

司会（石谷） 実際にワークショップであったりセラピーを導入するときの受け入れ側の対応の仕方でお考えであったり、実際の体験で感じたことはありますか。

森 その辺の役割がメディアエーターということになると思いますが、与えられた条件の中で可能な道筋をどうやって見つけるかが常に問われる感じがします。私が小学校で行った活動も、その当時の小学校の状況の中で何ができて、何が学校の先生にとっても違和感がなく、子どもたちにとっても参加できる活動かという思いの中で浮かんだことです。現場の今の状況をよくわかっていないと、突っ走ると結局実現しないことになる

でしようし、学校は難しいところですよ。

吉川 そうですね。

森 心の内面を扱うことに違和感が出やすい現場ですね。外面を整えていくのは得意ですけれど。ですから、先生が変わってしまった中で、町の記憶を残すほかの方法はないんでしょうか。子どもたちと一緒にと思うと、どうしても学校になってしまうのか。町の他の活動を使ってできないのか。いろいろ思っています。まいますけれどね。

吉川 アプローチを続けていって、実績を作っていくしかないのだろうと思います。理解は非常にない。カリキュラムがぎっしりでクラスでの活動の時間がとれないせいとか、高校などではワークショップを受け入れていただくのはなかなかたいへんです。特に追悼式や交流コンサートで演奏するなど、校外で活動するということについては、何かあったときに学校の責任を問われるのではないかとおそれるのか、子どもたちにとって素晴らしい人とふれあえたり、直にその体験から何かを感じるという貴重な機会であっても、なかなか許可はおりませんでした。私たちからしたら、子どもたちがいろいろ学習したり、発見したりする権利を奪っていると思えない。アートを通して何かを発見する喜びを体験されていない教師が圧倒的に多いと思うんです。私はもともと教師だったんですけれど。教師自身が自由に絵を描いたり貧しい鑑賞教育しか受けていないこともあ

り、そこで何が起きるのか思い描けないのではないかと思いません。

さつきも言っていたんですけど、今度モアイ像がチリのイースター島から来るんです。チリ地震津波からのご縁とはいえ、多くの町民にとってはモアイ像が町に贈呈されることはこの時点では自分に関係のあることとしてはとらえることはできなかったと思います。イースター島ってチリなんですけど、サンティアゴから飛行機で五時間かかるそうです。ポリネシア民族の文化なので、全然チリの文化とも違うらしいです。本物の石工が掘ったもので、イースター島では門外不出のものを島から出すのかと反対運動になったものをわざわざ軍隊が出て港まで運んで、今東京にあって、大阪にも四月ぐらいに飾られるはずですよ。

発言者 何のために？

吉川 三菱商事や日智経済交流団体を中心になっているんです。三菱商事はチリから銅を輸入していますので、チリと友好関係にある南三陸町にモアイを運んでくださるようです。別に地元住民の意向ではありません。

石谷 南三陸町と関係を作っていくことで、別の計画に役立てるといいますか。

吉川 町民にとって今、重要なことは職場や住宅の再建であり、国際交流の余裕はまだありません。もともとモアイ像が公園に

あったので、高校の商業科とかで、じゃ、モアイ像のキャラクターを作って、商品を作ろうという話が出ていました。これは悪いことではないんだけど、デザインとかアートが経済活動につながることでと、先生方は喜んでそのプログラムを受け入れるんだけど、詩を作るとか、歌を作るとかいうとまるで突然理解がなくなるといふ傾向にあると思いますね。

だから、チリの子どもたちのコメントの深さとこちらのコメントの深さが違う。何を届けるべきかという熟考がされていない。それをこの国の危機として受け取らなければならぬと思います。その両方を追悼式典で紹介できたことは大きいかなとは思っています。

森 そこにお金の問題や行政の問題、制度的な問題もあると思いますけれども、他方で、やはり皆さん、過去に直面していくのはしんどいと言うか、どこかそういうところがあって、そちらのほうに近づいていくような活動に対しては拒否感というか、重荷というか、そこまで子どもにやらせたくないとか、実は先生自身もそこまでかわりたくない。そういう感覚が生じるのではないかと思いました。

吉川 おっしゃるとおりですね。教頭先生に「クラス全員で震災というものにまず正面からもう一回振り返ったのは、あなたのワークショップが初めてです」と言われました。だから、二年目の一〇月がみんなにとって初めてなんです。有志の子ども

は作文に書いたりしているらしいんですけど、全員でというのは初めなのだそうですね。

森岡 私は森さんと同じ心理の仕事をしていますけれども、吉川さんのこのような活動の維持、昨日まで歌っていらっしやっただんですよね。

吉川 そうです。一昨日まで。

森岡 本当に超人的というか、タフな、人知を超えたようなエネルギーに驚きました。矛盾だらけのことを含めて、今日お話しされているような感じも一方ではあるんですね。でも、成果に至るまでのプロセスの長い道のりが本当は重要なんじゃないか。最終成果はビデオで示されたものですが、これだけしか見えないところが、われわれも含めてみんなある。

僕らの仕事はそうじゃなくて、その成果よりもプロセスに長くつき合っていく中にあります。森先生の枠組みでもそうですよね。ある枠の中で動いていくというところに手応えを感じるものがある。そこをうまくどう出すかというのが難しいと思うんですね。アートの世界は特にそうだと思うんです。

きりこという非常に深いその町、その村の伝承物、メディアとして特殊な技法、アートです。そういった土着の文化の素材をうまく使ったからこそああいうふうに生きて、みんなが共有できて、説得力ができたと思います。また、うまく使われませんでしたよね。最後はパネルになったことで、今度は皆さんの「きり

こを守るんだ」という声になって、維持していく、みんなのものになっていく、こういうプロセスそのものがすごく意味深い。

アートと言う場合には、何らかの素材を使う。セラピーとしてわれわれは確かにいろいろな素材を使いますが、吉川さんの場合でしたら、その技法というよりは、その前にきりこの面白さにとりつかれたわけですよ。その魅力があるからこそ使えるわけでしょう。森さんのワークだって、メールのやりとりは書くという作業にとても意味がある。書くということによって定着して、振り返り、残るんだけど、一人で書くのと森さんという誰かに届けるのは全然違いますね。今日の吉川さんの話も、歌を作って、結晶化していく、誰かに届けるんだというところに生じる集中力に驚きましたね。広い意味でソーシャルなパフォーマンスを作っていく。こういうったものを目の当たりにさせていただき、私も今日は驚きました。

こういうった材料、素材を見つけるといことは、必ずしも大災害の中で見えてきたものばかりではなくて、われわれはそういうのを忘れてるんだけれども、本来、日々いろいろな場所、今ここにもあるのかもしれない。それを丁寧に発掘することの説得性というかな。何かがあったから援助すべきで、こういうので結晶しましたというのは、どうもなんか変ですよ。アートの作業というのはもともと日頃からのものでしょう。僕はそう思っています。

司会（石谷） 私も初めて吉川さんのお話を聞いたとき、きりこをお使いになったことに非常に驚いたし、納得できるものでありました。それにものすごく力があると改めて認識したという意味でも、自分自身のアートに対する考え方が揺るがされるような体験でもありました。吉川さん、きりこを使い出した経緯をもう少しお話しいただけますか。

吉川 きりこに関しては、南三陸町で初めて発見したものではありません。二〇〇四年に一回仙台でプロジェクトをやったことがあります。神社庁が出した『祈りのかたち―宮城の正月飾り』（宮城県神社庁、二〇〇三年）という、今絶版になっていて、ネットで買うとすごく高くなっている本があります。それから、私たちの活動の影響があると思いますけれども、新しく大阪の国立民俗博物館でも南三陸のきりこを調べた本が出されました。あともう一冊、小学館じゃなくて、どこからか新しい本が出ています『東北の伝承切り紙・神を宿し神を招く』平凡社、二〇一二年。「きりこ」や「伝承切り紙」という言葉で調べていただくと思えます。

宮城県の海辺から北部、岩手県南部にかけてある文化なんですね。高千穂のお神楽をやるときも御幣束的な切り紙をかけて神楽を踊っていますし、世界遺産になった平泉の毛越寺の延年の舞のときにも切り紙を回して踊ります。佐渡島にも切り紙はあります。でも、あれだけ込み入った美しいものは塩釜以北で

す。しおがま鹽竈神社というのは奥州一宮で氏子さんのことは一切やらない神社なので、鹽竈のお膝元にある稻荷神社の方が代々ものすごくたくさんきりこを切っています。例えば収穫物を納める農家九軒に送るきりことか、布団屋さんだけのきりことか、お茶屋さんだけのきりことか数多く種類があつて、非常に美しいです。

仙台というのは七夕の文化で、和紙でああいうばかりのものを作る。七夕はビニールを絶対使つてはいけません。お祭りなのに黙つてやる。仙台は黙つてやるお祭りが多いんです。SEND AI光のページェントも黙つて電球の下を歩くし、冬はどんと祭というのがあつて、黙つて神社まで裸参りに行きます。黙つてやる文化なので、一枚の白い紙が神棚を飾るといのは非常にこの辺りの文化らしいということに着目したんです。そこで、お神楽を改めて演劇として見てみる「街が劇場になる日」という演劇イベントを街なかでやりました。杜の都なので、公園にもいっぱい緑があります。そこに綱をずっと張つて、みんなにきりこを切ってもらいました。ウルトラマンのきりことかいろいろあつたんですけど、宮司さんに指導に来ていただいてやったことがあつたんです。

それが面白かつたなというのがあつて、全然友達でもなかった女の人たち、半分は町の人でもなかった女の人たちが何かをやりながらコミュニケーションを形成していくためには手作業がいい

などということ、ああ、きりがいいなと思ったんです。

発言者 きりこというのはわりと神聖なものというか、神様に捧げたりというものを、こうやって一般化するというか、ポップなものに、軽く扱うことになるじゃないですか。そのときの説得とか、抵抗はあったんでしょうか。

吉川 やはり家の前に白い紙が貼られたら、「神様のものなのに気味が悪い」と言う人もいました。だから、「いろいろな色の紙で切ったほうがいいんじゃないか」という意見も出ましたが、やはりあれは白いから美しい。

一応宮司さんには断りに行きました。宮司さんはすごくぶすつとして、「ああ」とか言っていたので、大丈夫かなと思いましたが、結局いくら説明をしても何をやるかわからないわけです。ところが、六五〇枚のきりが飾られたら、ご高齢にもかかわらず毎日のように自転車で町を見て歩いてね。宮司さんは中学校の美術の先生だったんです。それで石巻の雄勝石（おがし）という黒い石があるんですけど、それに町の蔵のある家並みとかを白いペンできれいに描いて、「これも空き店舗に飾りなさい」とか持ってきたんです。ものすごくうれしそうでした。

だから、自分のやってきたきりが町の人たちによってこういふふうに展開しているということがとてもうれしかったんだと思います。その姿を見て、ああ、よかった、これは市民権を得たなと思ったんです。そして、もっとやろうとみんなその気

になったら、町がなくなつて、掛けるところがなくなつてしまつた。

司会（石谷） ありがとうございます。私はアートセラピーにも関心がありまして、ユングの言葉ですが、深い集合的な心理に根ざした文化やかたちを元型と言っています。アートセラピーにも曼陀羅を作ることがある種の文化的、民族的に根深いものを表す。そういった発想があると思います。きりこの絵の対称性や単純な形態というのは、そういった要素も含まれるのではないかと思つたりしました。

また、コラージュを作るときでも、はさみで切るといふ単純な作業が一種のリハビリ的な効果を発揮しやすいと言われています。描画だと非常に意味性が強くなつてしましますが、切ること自体は自動的な意識を活性化しやすい。宗教的なものとも結びつくし、ある種のセラピー的なものも持ち得る。きりこはその意味で、社会的、宗教的な意味だったり、地域、場所と深くかかわってくるように思います。そうした強さがあるのではないかと感じました。

兼子 先ほどのもう一つ確認していいですか。近畿医療福祉大（現在、神戸医療福祉大学）の兼子と申します。神社が出てくるというのは宗教と関係していたわけですが、その後、アルミパネルのきりこを消失した各家のところに設置したのですが、それは慰霊的な意味が出てきたんですか。

吉川 いえ、慰霊の意味を込めませんでした。宗教が入るとも駄目なので、私たちはあくまでもアートプロジェクトとしてやっています。すべてを海側に向けて、今生きている人がどういう姿なのかということも亡くなった人、行方不明になった人に届けようという趣旨です。慰霊と言えば慰霊なんですけれども、あくまでも生きている人のために作っていると考えています。まあ、いろんなふうにいる人とは思いますが、それでも。

兼子 住民のほうはどう理解しているんでしょうか。

吉川 皆さんはあれを見て、「ああ、ここにお菓子屋あつたっちゃ、そう言えは」という感じですね。あとは言には出さないけれども、ご先祖様も裸一貫で頑張つて、自分もゼロからスタート、というのがあるから、車に乗つてちよつと見て、ああ、あの人も頑張っているんだな、とたぶんとらえてくださっているのではないかなと思います。それはそれぞれだと思います。

兼子 その宮司さんは（震災後も）ご存命ですか。

吉川 もちろんです。だから、取材殺到なんです。きりこと言えばその方なので。その宮司さんだけではなくて、戸倉地区の神社の人とか、歌津地区の神社の人、みんなきりこを切りまします。震災後の六月に役場の人が戸倉の宮司さんを連れてきました。若い宮司さんなので、「一緒に切っぺし」と言ったんですけど、シヨックが大きすぎて、とてもそういう気持ちはなかったようでした。でも、今はたぶん切りまくっていると思いま

す。南三陸のきりこにもすごく脚光が当たつて、戸倉の宮司さんにも取材が行っているの、やる気満々だと思います。そういう意味でもよかつたなと思つています。

あともう一つ、きりこは宗教というよりも、慣習、民間信仰という感覚が多いのではないかと気がしています。

兼子 学問的に言っているの、宗教法人になるような宗教ということではなく、民間信仰を含めてなんですけれども。

吉川 風習として、みんなが家の中にもあつたものにとらえているのではないかなと思います。

兼子 ちよつと思つたのは、ご先祖様とか、そういうものと非常に密接に関係してくるのではないかと。

吉川 もちろんですね。だから、最初の年にも「ご先祖様の神棚に上げっから」と喜んでくれた人もいます。

あとは、例えばお酒のラベルになったり、仮設のプレハブの商店に私たちが切つたきりこの看板をつけたりしました。あと、志津川地区の仮設商店街はコンサルタントがデザインをやっているんです。それに建築家の先生が入つて、建築家の先生が私たちのワークシヨップを受けに来て、それぞれの家の上にきりこ風の看板が乗つたんですけど、私たちは何も知らなかつたんです。できたら、黒枠だったんです。だから、逆転した状態です。ものすごく変なものができて、あれができたときに、みんな彩プロジェクトの女性メンバーが、「あれ、舞ちゃんやっ

たのか」ってみんなに言われて、「違う、違う」って否定するのにも大変でした。

そういう変なことも起こっていますが、それらも含めて大混乱の中ですべてが進んでいますので前向きにとらえるしかありません。デザインを気にしているという意思表示だけでもできているから、まあいいかと思つて、かなり大ざっぱに肯定しながら進んでいます。

森 アートセラピーというわけではないですが、二〇一〇年夏の活動で、それぞれの店の過去とつながるシンボルとして使われていた。その店はいつからあったとか、どんな由来があるかなどがきりこに表現されていて、震災後にもう一度行なわれているというのが本当に不思議な巡り合わせと思います。そういう過去とつながる時間軸を作ること自体がなかなか大変なのが震災後の状態だと思います。ですから、時間軸を作ること、共有することで横につながるといふ、縦と横のつながりがきりこという一つの活動で行なわれているところがすばらしいと思います。

私は一つずつのきりこが曼陀羅という感覚よりは、個々のきりこがたくさんあって、全体が曼陀羅的なものになっていると考えるほうがいいのではないかと思います。曼陀羅では、さまざまな要素が統合されて、一つの中に収まる。聞いていて、そんなイメージを思いました。

福田 関西学院大学大学院の社会学研究科院生の福田と申します。私は慰霊祭、追悼式の研究をしています。もともと長崎の原爆で慰霊祭がどういふふうに行なわれてきたかということから、その後、福知山線の脱線事故、阪神・淡路大震災、水俣病、慰霊祭が行なわれているさまざまな災害でどういふふうに入々が儀礼とか語りとか歌を通して、それと向き合ってきたのか、そういう研究をしています。

その中で南三陸町の役場にもお話を聞きに行ったら、なんかすごい人がいると。追悼式も全部手配して、ほかの市町村と比べて全然違う取り組みをされていると聞いて、吉川さんと去年一〇月にお話しさせていただき、今日も来させていただきました。

今日の森先生の発表と吉川さんの発表をお聞きして、トラウマといかに向き合うのかということについて、重要な点が三つあるのかなと。私、トラウマの専門家でもないので勝手な理解になりますが、一つは記憶のテンプレート、メディアと言いつてもいいんですが、いかにそれを流し込む鑄型があるかということなんです。私の場合、追悼式でみんなの前でしゃべることだったり、あるいはアートもそうですよね。また、語りを文章化すること、記録化することもそうです。そういう面では宗教もそういう役割をこれまで果たしてきたのかなと思います。それから、今からどんな始まっていくことだと思いますけれど

も、いかに記念碑を作るか、モニユメントをいかに作るかということですね。記憶のテンプレートがトラウマと向き合うことかということの一つの大事な点かなと思います。

二つ目は、メディアエーター、媒介者の役割ですね。それが吉川さんはすごいと思います。もちろん森先生もすごいと思うんですが、すごいというのは、森先生だから話せた、文章化できたということがあるからです。吉川さんの場合は、吉川さんが震災前からずっと関係を持ってきたから、五・一一、六・一一、七・一一、八・一一、九・一一、そして一年後の追悼式ができたということが絶対的であって、同じプログラムをほかの役場がやって成功するかというと、それはまた全然違うことだなと思います。媒介者が、いかにオーナーシップを持たせた形で、押しつけるのではなくて、いかに内発的なものとして作るか。バッテリースティックですけれども、内発性を持たせる。それは非常に高度なコミュニケーション能力が必要なので、そうした場を作ることで、ワークショップのコーディネーターとしての特異な力が発揮されたのだと思います。

トラウマと向き合うときにもう一つ重要だと感じたのは、指向性、誰に向けてするかということですね。实际的に森先生に向けて語るわけですし、最後、過去の自分に書くということとは、そういう指向性があつて初めて成り立ちます。誰にもわからない不特定多数ということも非常に重要ですが、誰に向けて

をするかということも非常に大事です。

例えば川島秀一先生という三陸の語りを収集しておられる方がいます。その方が昭和の津波の記憶を人々に聞いていたら、「この話は盆棚の前でさせてくれ」と言われた人がいたんです。そこは死者がいるところだから、死者のいる前で自分が語ることは供養になるわけです。誰に向けてということが、吉川さんのイベントの場合でも、絶対的に海に向けてされるわけですよ。なぜかというと、行方不明者の方がそこにまだいらつしゃるからです。死者なり、過去の自分なりということが非常に重要だということです。

一昨日、私が参加させていただいた南三陸町の追悼式では、チリの人々という、ある種のわかりにくい他者が出てきました。そういう他者に向けるときに記憶のあり方とトラウマの向き合い方も非常に複雑になってくると思います。長崎の原爆の場合は、他者がいろいろ変わってきたということがありました。

その三つの点がトラウマと向き合うことにとって非常に重要なポイントであるのかなと今日は理解させてもらいました。勉強になりました。ありがとうございます。

森 最初の鑄型のお話はそのとおりだと思います。人生史を作る場合、自伝というのは普通、時間軸に沿ってできます。当然のように時間軸があるように思いますけど、時間軸も一つの鑄型なんです。それに沿うことで語っていくことができる。もし

それがなかったらどこから語っていいか、次に何を語っていいかわからない。混乱が生まれるわけです。時間順に語っていくことで次に何を語ったらいいかわかるし、お互いに了解して進んでいくことができる。

それを時間軸でない方法でする方法があるかもしれません。何かの整理戸棚、引き出しに整理していく感じで種類別に分けるといった、整理の仕方もあるかもしれません。鑄型はいろいろ考えられると思いますけれども、時間軸は非常に使いやすいく基本的な鑄型ですから、それが使いやすいし、強力であると感じるわけです。絶対に時間でないといけないというわけではないと思います。

田代 山梨英和大学の田代順と言います。お話しどうもありがとうございます。すぐ聞き入りました。森先生と吉川さん、お二方に一つずつの共通の質問があります。森先生はエクスポージャー・セラピーの話で曝露と馴化とおっしゃっていました。ドイツ人はわりと乗ってできるけれども、日本人は書けないとか、できないと言っておられました。曝露と馴化、エクスポージャー・セラピーは日本的な文化、日本人の有り様にとって危険性があるのでしょうか。

それから、吉川さんには、おやりになったことが結果としてトラウマにどんなふう作用していたのかということをお聞きします。雑駁な質問ですけど、思うことがあれば聞きたいと

思います。

それから、お二方に最後の質問ですが、集合的記憶というか、記憶の社会化についてはどんなふうにお考えですか。トラウマ記憶を社会というテンプレートに流し込んでいって、一つの文化じゃないですけど、外在化して、例えば「原爆を忘れない」とか、社会化していくことに關してはどんなふうにお考えがありますか。以上、三点です。

森 エクスポージャー・セラピーの危険性というのは多くの方が感じるみたいですけど、患者さんにしろ、今回のような競争体験者にしろ、それが適用できると思われる方にきちつとした枠でやると、極めて有効であるということは日本でも感じました。

ただ、日本の社会全体として、過去のつらい体験は、戦争体験も含めて、そっとしておいたほうがいいという感覚があることは確かです。実践しようとする、当事者でなくて、周辺から「やって大丈夫か」という不安の声が起こりやすい。これは病院でもそうですし、ほかの場でもあります。どういう対象にどれほど有効かという証拠をきちつと示していく必要があると思います。日本人に向かないとか、そういうことは決してないと思います。

私が思っているのは、過去のことには蓋をしておいたほうがいいという文化を日本全体が持っているとするれば、それ自体が

ある種戦争へのトラウマ反応ではないかということです。戦争という問題をできるだけ忘れようとして戦後社会を生きてきた日本の一つのトラウマ反応ではないか。集合的なトラウマ反応と言いますか、そういうものが影響しているのではないかという気がしております。

司会（石谷） 間に発言して申し訳ありませんが、例えば海に向きあうということも、ある種のエクスポージャー的な側面があるのではないかと思つたのですが、そういったことになかなか向き合えない人がいるということもトラウマに関係すると思います。吉川さん、先ほどの質問についていかがですか。

吉川 先ほど、大変なときは記憶が飛ぶという話がありました。一回避難したところに津波が来て、また逃げた人は、同じところで記憶が途切れていたりします。話を聞くと、「そこから記憶ないんだ」とよく言われるんですね。「誰々さんもそこから記憶ないって言ってたよ」と言うと安心してくれる。だから、相当にそういうトラウマがあるんだなということは間違いないです。子どもたちは地震が来るたびに、寝ていたのがわつと起きます。かなりパニックになって、避難するときに海側に行こうとすると、「そっちに行っちゃ駄目だ！」と叫んだりするので、非常に深刻だろうなと思つています。

きりこのプロジェクトがもし何かトラウマに作用しているとするれば、例えば記憶がなくなっている人が、ごちゃごちゃな自

分自身の失ってしまった体験を見つめ直す一つの契機を作っていると思うんです。例えば、さっき話した自分の土地にヒマワリの種を蒔いた人は、一回公園に逃げただけで、それ以上津波が来たので、杉林の中から小学校に逃げました。たぶん道なき道を逃げたのだと思います。彼女が、自分が生きてきた土地を大切に思つて、蒔いたヒマワリがいつ咲くのかなとすごく楽しみにしていらつしやる姿を、私たちはそのままそこにコメントをつけて再現しています。その人に直接「大丈夫だから」と語るのではなくて、そのパネルを通して、違う時点から人の目になって自分の姿を見るという体験になつていてのではないかと私は感じています。そのことは、自分がそこで暮らしてきたことも、あそこにああいう蔵があつたなとかを見つめ直すことにもなる。

さらに、メッセージが日本語で書いてありますけれども、あれは一応取材を元に書いていますが、全く取材ができなくて、背中を見て書いたものもあります。例えば、自分ら夫婦は助かったけど、店の地続きで兄夫婦がいたり、弟は町のリーダーと目されていたんだけど、兄弟みんなが死んでしまった人もいます。その人は商店街の会計係を一生懸命やっているんです。一回、話を聞きにいったら、お互いに泣いて聞けなかったもので、これはもう駄目だと思つて、その後ろ姿を知っていたので、「生きる喜びを分かち合いながら」とつけて差し上げたんです。

たぶん、なぜ自分だけ生き残ったんだろうと思っただけのことか書いてある。彼らがその町に生きてきた誇りとかアイデンティティーを失わないための社会化ができてきたのではないかなと信じています。

田代 それまでその人たちは一体だったわけですよ。でも、アートのプロジェクトを通して、われわれの言葉では外在化と言っていますが、切り離すというか、そういう部分を促進したということですか。

吉川 だと思いません。それで、「うちにもやって、うちにもやって」とすごく言われるんです。だけど、瓦礫の山がいろいろなところに点在していたし、基礎解体をやっていたので、しばらく新設するのは自粛していたんですけれど、この後また立てなきやならないかなと町の人と話をしているところです。本当はみんなの分をどんどん立ててあげたい。本当に一八〇〇軒分全部やってあげたいぐらいの気持ちがあります。

記憶の社会化という面でも、みんなが通る幹線道路のそばにそういうものが林立していることで、どうやって異様なものが目に入ってくるか。いったいこれは何なんだということから入って、気になるからよくよく読んでみると、他人の家であつても、ああ、うちと同じだなとか、たぶん共感していた

ただけることが書いてある。彼らがその町に生きてきた誇りとかアイデンティティーを失わないための社会化ができてきたのではないかなと信じています。

みんなすごく忙しく、追われ追われているけれども、あれが立っていることで、ちょっと一息つくと、本当はあのきりこを作るのは自分たちでなければならぬんだという気持ちも出てくる。今そういう気持ちが出てきているみたいです。

たぶん波はあると思うんですけども、前の記憶に目をそらすに、先人が生きてきたものをどういうふうにししい町に採り入れていくのか、魂を町にどう入れていくのかということを考えてもらうきっかけに、私は絶対になっていると確信しています。

田代 そうすると、そういうプロジェクトがトラウマに対してある意味ですさまじいバッファというか、あるいは仲介みたいなものになっていって、それがマイルドになっているというか、そういう形なんですか。

吉川 私は専門家ではないので、よくわかりませんが、田代 アートのプロジェクトを通すと、ある種マイルドになっていくという言い方はおかしいんですけれど。

吉川 そうですね。非常に短いコメントなので、逆にいろいろなふうにとれますよね。長々説明してあるものではないので、ある日にはこう見えるし、ある日にはこう見える。落ち込んでいる日もあつて、あれを見たくない日もあると思うんですけど

ど、自分の店があったところにあれがあるということは、自分がそこで生きてきたんだということに直結しているのは間違いないと思います。

福田 トラウマ自体を直接語るのではなくて、アートを通して間接的に語るというようなテンプレートを作られていて、非常によく機能しているように思います。

吉川 なるほど。そうですね。勉強になります。

石谷 今日の会で、要するにセラピー的な効果があるかないかということが出てきているわけですが、もともとはそういうことは認識なくされていますよね。

吉川 そうですね。セラピーとは考えていないですね。ただ、記憶のよすがが全部ない中で、そこでポジティブに生きてきたのに、そのことさえ忘れようとしている。そういう危機を感じていました。なので、あそこの敷地に立てるのがみんなまで共有できると確信していました。だから、いろいろなことを言われるかもしれないけれども、やってみようと思ったんですね。

歌に関しては、全然確信は持てませんでしたけれども、たぶんこのままじゃ駄目だと思ったんです。このまま何も振り返らなくて、本当に頑張ってきたのに、本当に水汲みして、みんなで少ない食料を分け合って、流れた船を引っ張ってきて頑張ったのに、そのことを忘れてしまう。世界中の人が褒めたたえてくれたその姿をもう一回追悼式典みたいな場で子どもの口から、

それがよかった、ということをもってもらえば、どんな意地悪な大人でも、どんなにやられている人でも、それこそマイルドに「頑張ったね」と伝えられるのではないかなということはありません。でも、セラピーとかそういうふうには全然考えていない。

山下 こういう場があるから、そんなこともあるのかなという感じ。

それともう一つ聞きたかったのは、スクールカウンセラーがいらっしやったわけですね。スクールカウンセラーとどういう役割分担をしたり、そこでスクールカウンセラーがどういうふうに関与したのでしょうか。

吉川 密接にかかわることはなくあまり私たちにとっては頼りになることはありませんでした。保健室にスクールカウンセラーが一人いて、常駐のところもありましたが、常駐でないところもあるんですね。先生が、「追悼式典みたいな花のあんないっぱい飾ってある異常な場に子どもを連れていって、町長さんとかみんな泣きながら式辞を読んだら、子どもが怖がる」と言っただけです。じゃ、スクールカウンセラーに聞いてみようということになったら、スクールカウンセラーが来て、「うーん、やっぱり危ないかもしれませんね」と言っただけです。なので、「じゃ、歌うときだけ中に入れますか」という話になって、歌うときだけ中に入れるようにしました。

でも実際には、子どもたちのバスが着いて、「いま中に大きなお花の祭壇があるから、みんな拜んでから練習しようか」と言ったら、誰も嫌と言わなかった。先生たちも全然「いや、それは駄目です」とか言わなかった。先生たちも全然「いや、それで、自然に手を合わせました。さつき写真がありましたけれど、「もういいよ」と言うまで、みんなこうやって手を合わせているんです。

だから、四年生ぐらいの子どもでも、いま何が起こっていて、大人が何をしているかというのはわかってる。祭壇に手を合わせるという子どもたちなりの気持ちというの、立ち直るためにすごく大切なことです。子どもも傷ついていると思うんです。親が大変なので、子どもはすごくいい子なんです。高校生まで含めて、本当にみんなニコニコ帰っているんです。人に会うと、「こんにちは、こんにちは」って高校生まで言うし。

だから、本当に異常な状態で子どもも頑張っている。そんな状態ですから、子どもたちは自然にその場を受け入れたいと思うし、必ずしもスクールカウンセラーが心配したことは起こらなかったと思います。何かちよつと違う。もつと体験させてもよかつたのではないかなと思うこともあります。子どもたちは耐えられたと思うんです。町長さんのお話を聞いても耐えられたと思うんです。もつと子どもを信じてよかつたのかなとは思いますが、いろいろなお子さんがいるので、親を

亡くされた子どももいるので、初めに拜んで、歌うときだけ入れるというのはベストだったのかなとも思いますけれど。

森 先ほどのご質問に半分お答えしていませんので、よろしいですか。今の議論の中で二つぐらい思ったことで、一つは外在化とか対象化ということですが、本当にそのとおりだと思います。NETの作業の中でも、例えば虐待とか、あるいは戦闘地帯で大変な思いをした方に、「場所を描いてみましょう」という作業を入れることもあるとマニュアルに書いてあります。図面化して、この辺で戦ったとか、視覚的に自分が置かれていた場を見るということが既に体験を対象化することになります。

ただ、対象化だけしてしまうと、離れてしまつて自分の思いがなくなりやすから、ビビッドな体験を感じる自分と、しかし対象化する視点と、その両方の視点を持ち続けることがトラウマ治療では非常に大事だと言われています。両方を持ちながらかつ両方がばらばらにならない。その難しいバランスです。その両方の視点を行き来するということも極めて大事な作業になつてくると思います。

それから、セラピーということを意識されていなかったということでした。実際セラピーは様々な支援の中の一つの特長な形であつて、吉川さんの活動をそう呼ぶ必要はないと思います。ただ、活動の中に含まれる要素を考えますと、例えばエンパワー

メントという言葉で表現されている要素があると思います。では、セラピーの中にエンパワーメントの要素がないのかというと、やはりあると思います。支援の諸要素と職業アイデンティティーは重なり合っていますから、幾つかの要素をセラピーと共有していると言えるのではないのでしょうか。

最初のご質問の集合的記憶と個人の記憶の問題、社会化をどう考えるかということについては私も悩んでいるところです。私が戦争体験のインタビュウで考えたのは、個人的記憶か集合的記憶かという二項で分ける前に、その中間の家族や地域社会の親密な関係の中でどういうふうに共有するかという問題です。これは大きい問題なのではないかと考えています。個人と大きな社会との間にある社会ですね。その社会の中で記憶がどれくらい語られているのかということが鍵を握っている。そこで語りにくいがために外でも語っていない。ある年齢に達して、もう家族も亡くなって、家族の縛りもなくなって、これを話したからと言って誰も傷つけることがないので語れます、という方がおられるわけです。そうすると、初めて外の世界に向かって声を出せる。そういう感覚というのはやはりあると思います。自分が語ったことが誰かを傷つけるということもありますし、誰それが語っていないのに自分は語れないとか、そういうふうな関係もあります。

だから、家族や小集団の中でいかに語っていきえるのかという

ことは本当に難しい問題かなと思います。そこが語れるようになれば、社会全体での共有も容易になるのでしょうか。そんなふうにあります。

森岡 お話を聞いていて思ったのは、「あなたがトラウマを受けた被害者であるから、治療を受けなさい」と、いわば受け身にさらされてしまうのは、私はセラピーじゃないと思うんです。その人の主体を奪わない。むしろ森さんの実践はそうですよ。常にその人が主体であるという形で、われわれは介添人か、ある意味証人ですよ。これは、ナラティブ・アプローチが最近、セラピストとやることをやめまして、われわれは証人である、立会人である、という実践をしているのに近い。あなたが主体ですよ。記録は常に分け持つ。公開する。今までセラピストは隠していたんですよ。そうではなくて、公開する。共有する。これが最近の動きなんです。

いまの吉川さんの実践もそうだと思います。市民たちの主体を奪わずに、あなたたちが主人公なんですよという意味でのアート・メデイエーターですよ。こちらが主導権を持って、こうしましょうなんて匂いをかぎつけるとみんな嫌がると思いますよ。ものすごく微妙なことをみんな知っていますものね。うまくいったのはたぶん、主体を奪わないということができたからじゃないかと思っています。そういった意味では、セラピーの今の流れと共通しているんですよ。

吉川 いま被災地はすごく苦しい状況で、本当にいろいろな意味で問題ばかりなんです。たぶん来年の今頃は緊急雇用のお金が打ち切られると、みんな首吊りする状況になると思うんです。そういう中でいろいろな支援があります。有名人が来たり、支援の押し売り合戦なわけです。みんなうんざりしているわけです。

だから、こちらがなるべく主体を奪わないように、その人たちを主役に行いたいと思っても、例えば高校生ぐらいだと初めから、「また来たのか」ということが今後はものすごく起こっていくと思います。今まではそうではなかったと思いますけれど。

一月、冬休みが終わってから廊下を歩いたときに、「こんにちは」と言われる度合いがものすごく減りました。だから、もう平常に少し戻ってきたんです。支援している人が来ても、もう「こんにちは」と言わない。ほっとしている。子どもたちもみんな疲れてきたんですよ。そういうことを感じていて、これからだなど本当に思います。やっと子どもの変な緊張が少し解けてきて、やっと通常に戻って、「また来たのか」みたいなモードになってきた。これからどういうふうにやっていくのかというのには本当に課題だなと思います。

山下 京都造形芸術大学の山下里加と言います。阪神・淡路大震災の後にアーティストがどういう活動をしたのか、あるいは

動かなかったのかということも含めてインタビューしたものを作ったりしていました。美術のほうに関心があるのでお伺いしたいことはたくさんあるのですが、せっかくこういう場でですので、先ほどの吉川さんはスクールカウンセラーが役に立たなかったという発言は、心理を専門にされている皆さんにとってはどう受け取られているのかなということをお伺いしたいと思います。

逆に言えば、吉川さん以外にも今回の震災に関して活動しているアーティストやアート関係の人たちはものすごくたくさんいます。必ずしも、主体を奪わないようなことではないようなアートの活動もたくさん行なわれているので、アート側の人間としてはもうちょっと真摯に受け止めていきたいと思うんです。と同時に、スクールカウンセラーが役に立たなかったという発言に対して、専門の方々はどういうふうを考えていらっしゃるでしょうか。

川田 私はこの兼任研究員ですが、心理の専門家ではなくて、芸術学と美術史の専門家で川田都樹子と言います。ご両名のお話、どちらもとても面白かったのですが、先ほどご質問された方と同じようなところが私もすごく気になりました。私はこの研究員をやっている手前、アートあるいは芸術学というものと心理あるいは臨床心理学というものがどういう形で協働し得るのか、あるいはかわり得るのかということにとっても関心

を持つています。今日はそういうかわりの部分や可能性の部分のいろいろお聞きできるのかなと思って聞きにまいったわけですが、先ほどの吉川さんの話では、スクールカウンセラーはかえって役に立たなかつた、ああ、やっぱりそうかと。すみません、やっぱりだなんて言つて。

吉川さんにぜひお聞きしたいのは、もし今やつていらつしやるプロジェクトの中で心理臨床の専門家に何らかの形で支援してもらつたとすれば、あるいは、かわり合つて協働していくとすれば、どういう形を要請なさるだろうかということです。

吉川 私たちと一緒に行つていただければ、本当に助かると思います。例えばきりこを切つてるとき、津波のきりこがありませんね。ああいうことはやっぱりすぐトラウマだと思つて切つてしまいます。それを切つた人に対して、いつたいどういふふうに接していけばいいのとか、全くわからないわけです。

被災直後から役場職員のためにもカウンセラーが派遣されてきたんですけど、部屋で待つていますよ。でも、その部屋に入つてゐる暇はないわけです。避難してゐる人たちがみんな長蛇の列で物資を求めているようなところで、役場職員は自分の親が流されて、頭がおかしくなりながら、同じパンツをすつとはいて働いてゐるんです。そこに行つてカウンセリングしてください、なんて言える状況ではなかつたです。だから、カウンセラーの人が二人ぐらいゐる部屋には誰もいませんでした。

私たちはドクターとかがうあ者で髪の毛を切るのが上手な人やソーシャルワーカーと一緒にチームを組んで乗り込んでいつて、「いいがら、いいがら、集まれ、髪切つてやつから」と言つて髪を切つたり、足湯でマッサージをしながら、その中で体の不調とかを聞きました。避難所にはドクターもいたのに、ドクターにもものすごい不自信感を持つてゐる人もいました。いくらドクターに言つても、自分の症状は改善されない。もう二週間寝たままだという人がいて、考えられない状況だったんです。DMAT「災害派遣医療チーム」も来ていましたが、彼らは瓦礫に挟まれてた人を救助するのな知識の人だから、切つたり貼つたりの人たちなんです。うちの先生たちが行くと、便秘薬をくれとか、風邪薬をくれとか、それから自分のことを語る。そういうふうに分けたので、そこに専門のカウンセラーと一緒にいってくれば、この人はやばいなと感じたときにすぐ専門家に代わられるのにと何度思ったことかわからない。なんであなたは保健室にゐるの、と。

このワークショップをやつてるときに、一言出した言葉でどれぐらい精神的にやられてゐるかわかりますよね。歌えるか歌えないかわかりますよね。その子どもの微妙な表情を感じ取れるような場にしてほしいとすごく思いました。だから、地域の人たちが集まつてゐる場で、われわれと一緒にアート活動をしてくれればいい。

一番やられているのはお父さんたちなんです。船が流されて、やることなくって、今は瓦礫処理とかで変なお金が出来ているから結構高い給料をもらって、浴びるように酒を飲んでパチンコをやっているわけです。そして、生きがいが無い。今まで隣の人よりどんなに大きなカキを取るかで競い合ってきた人たちが突然陸が上がって、瓦礫処理をやっているわけでしょう。そういう人たちは家にこもっているもので、引っ張ってきて、みんなで縁台を作ろうとか、そういうのをやろうと言っているんです。そういう場において、一緒に話してくればすごくいい。協働したいです。本当は私たちがそ助けてほしい。

川田 今のお話を聞いて、私も何らかの形で協働するようなことができればいいなとは思いますが、先ほどの森先生のお話にも構造化ということが出てきたと思います。のべつ幕なしに援助するとかということではなくて、心理臨床の専門家の先生方は構造化という枠構造をとっても大切にしていらつしやると思わうんですね。そういうところをどういう形でサポートすればいいのか。特にアート活動との連携の可能性を、心理の先生方はどんなふうに見ていらつしやるかお聞きしたいと思います。

森岡 それはもう私が答えるよりも森先生がお答えになるほうがいいですね、甲南大学のアート・アンド・セラピーというのに私も時々邪魔しています。一番根本的な話題が出たのですごく驚きました。今のお話はとても耳が痛い話で、今の

話は何も珍しい話では全くありません。スクールカウンセラーはいかに動いていないかとか、マイナス面もむしろあるということはよく聞いています。それはわれわれの教育のシステムの大きな問題だと思っています。

先ほど言ったように、セラピーというのは本来そうじゃないと私は思っています。むしろこれからと思っているんですけどね。要は、われわれの専門教育というのはこの人が何らかの傷を受けているとあるチャートが生まれてしまう。自分の地図がある。その地図に基づいて、何かしなきゃならないという動きをしている。そうすると、われわれはある種の構えの中で相手を引っ張り込んで、その中で治療するという旧来型のセラピーのトレーニングは今でも根強いんです。

でも、本来そうではないと思っています。私自身はむしろ逆に即興的だと思っているんです。その場を生かす。だから、吉川さんと一緒についていくというのは当然でしょう。スクールカウンセラーはなぜそこで歌わなかったんですか。当然歌うわけですよ。歌って気持ちいいじゃないですか。その場を生かすためにセラピーしているわけだから。その中の一人一人の言葉、表情の中を後でフォローする。われわれの仕事は直接援助じゃないんです。後でフォローとか、前後でその方々の変化をよくキャッチしていくのが仕事なんです。直接ならば、お医者さんなり保健師さんたち、看護師さんたちがケアできます。僕ら

はそのケアの方法を持っていない。直接的には持っていません。要は一緒に動いていく。それしか方法がないんですね。即興性と一回性。これをどのようにわれわれが生かせるような力を持つつか、あるいは方法を、経験を積むかということにかかっているんですね。今のお話はあちこち聞いていますよ。必要ですね。

構造化の視点は何かというのは森先生からもしっかりと答えられると思いますけれども、一方で、僕たちは失敗もいっぱいあるんですね。一番怖いのは、一緒に動くことで見えなくなってしまうことです。動くとか何かした感じがする。成果が表れた。そこがどこにつながるんですか。動くことで見えなくなってしまうこともあるんですよ。みんなが盛り上がった。でも、忘れたことはないのか。ここの部分をとらえるには、動かないほうがいい場合もあるんですよ。

つまり、何かできるとか、生まれるとか、歌詞ができたとかということだけで見てしまうと、それによって隠れるものがある。隠蔽してしまう。隠蔽した部分をとらえるには実は非常にトレーニングが要りますね。そのために構造化というトレーニングをやるんです。私はそう理解しています。だから、最終的に構造化というのは現場でわかるのが一番いいです。私はそう思っています。

森 私は今日、トラウマの記憶を、最近の言葉で言えば、がっ

つり扱う上で、何らかの構造にのっとってやらないと危険である、扱えないという意味で、構造化という言葉を使いました。部屋で待っていることを構造化と呼んだわけではありません。それは先ほど鋳型、テンプレートという言葉方をされたのと全く同じような意味です。

そういう意味では、吉川さんの活動も、歌を作っていく手順を考案されて、この手順に従えば二時間でできる構造を持ってきてるので、すごく構造化されているんです。だからできたと思います。自由に歌を作りましょうと言っても、いつまでたってもできないと思うんです。そういうものが構造化であって、何らかの活動が形になっていくためには構造が必要であると思います。

それから、部屋で待っている心理士の問題は、構造化の問題というより、今が必要かということについての見極めがなかなかできないということではないでしょうか。被災地の支援活動でも段階によってニーズが違います。悩みを相談しに来られる時期もあるのかもしれないけれども、そのときにはそんな人は誰もいない。来られる状況ではない。

そうすると、今の段階では心理士として何ができるかを判断して、ただ待っているだけじゃなくて、今はこれをするべきだと判断して何かお手伝いしても構わない。物を運ぶお手伝いをする中でふと言葉が漏れるとか、そういうことでも構わない。

足湯のお手伝いをするので構わない。

それはその現場で発見していくことが大切だと思うんですけど、私たちは基本的な教育システムが、相談したいと思って来る方に対応するための訓練に集中していますので、どうしてもそこから抜けれない心理士が多いわけです。状況に応じてそこから抜けることも学ばないといけない。うまくやっておられる方もあるはずですが、そこから抜けられずに、せっかくいのに役に立たないというケースも生まれてくる。そんな感じだと思います。

発言者1 僕も臨床心理士でスクールカウンセラーをずっと長くやっていたので、耳の痛い話ですが、自分がやっているときもすごく実感しました。始めた頃は部屋にやっぱりいたんですけど、誰も来ない。そうなるでしょうがないので、先生に頼んで自分から授業を見に行ったり、休み時間に遊んだりとかというのをやりだすとほつほつと人が来るようになる。

震災に関してすごく思ったのは、何県とは言いませんけれども、東京から派遣されていった臨床心理士の何人かが、一部の避難所に「臨床心理士お断り」という張り紙があつて、とてもきつかったということをおっしゃっていたんですね。

それはおそらく吉川さんの話されたことと、役に立つ術をうまく知らなくて、御用聞きみたいに、「何々ありませんか」みたいなことを突然降って湧いたようにやったということが一番

大きいかなと思います。さつき森岡さんもおっしゃっていましたけれども、臨床心理士の訓練として、多職種でチームプレーをするということが欠けている部分があるのでないかなと。自分の臨床心理の教育を振り返ってみても思います。かなりきつちり構造化されすぎてしまっている。

でも、危機介入の場合はそういうものをもう少し臨機応変に考えてやる必要がやはりあるなと強く思います。ですので、多職種でチームプレーと危機管理の場合の構造化を少し臨機応変に変えていく術を今後臨床心理士は持つべきじゃないかと思いました。以上です。

発言者2 この院生で勉強させていたでいてるんですけど、その前、広告のほうで働いていたので、企画とかをすることが多かったんですね。

広告をやっていたことと今勉強していることで差を感じたのは、広告では例えば一〇個ぐらい企画を出して、二個、三個いれものができれば、それはすごく成果が上がって、それなりに大きなものになるんですが、こういうのは逆にどれだけうまくいくかということを見据えないというか、例えば一〇〇人のうち九〇人うまくいっても、一〇人を傷つけることになるのはすごく怖いものだと考えます。例えば、ワークシヨップでコラージュ療法をやつて、一〇人のうち八人、九人がうまくいっても、一人はそれを見ることで気分が悪くなるかもわからない。

そういうときに、一人カウンセラーがそばにいてくれることでグループ性と個性のよいことができる。この人の気分が悪くなるといけないので別のルームで対応するとか。うまくいったらオーケーだよねということと逆に、悪くなるなら、ここで押さえておく。そういう見極めができるプロフェッショナルな方もいます。勉強させていただいて、すごいことだなと思ってるので、そういう面で、言われていたような協働作業がうまくできればと思います。

吉川 一年目のとき私たちは、一人でもそういう子が出たら全部なしだなと思ってやりました。アーティストと現場に入るのをすごく躊躇しましたから。「一人でも傷つけたら駄目だよ、僕はできない」とすごく言っただけです。でも、勇気を持ってやってくれて、何事もなかったので本当にラッキーだったと思います。

今回の高校はもしかしたら一人、二人は主体になっていないということを感じました。最後まで走ったプロセスがあって、やらされているなとか思っても、最後に追悼式で演奏して自分に返ってきたもので全部逆転して、ああ、自分はやったんだというふうになると考えながらやっているわけですが、アンケートを見るとやはり一人、二人、巻き込めなかったなという子があります。

でも、あまりに時間がないのと、依頼された国際交流事業だ

からやらなきゃいけなかったわけですよ。それが本当につらかったです。だから、本当にこっちがPTSDになるなと思った。子どもたちがこの後それを肯定的に受け止めてくれればいいなというのは思っているんで、今後の記録とかで頑張るしかないなと思っています。

福田 スクールカウンセラーが役立たないという話ですが、今日の吉川さんの発表を聞いて思うことは、トラウマと向き合わせるといのは語り得ないものを語らせるだとか、声なき声を聞くとか、見えないものを顕在化させるとか、それをつかむだとか、ある種の危うさを伴うことだと思っただけでも、その働きは大変重要なものだと思います。三陸はもともオガミさんとか言っただけ、イタコさんですか、そういう文化がある中で、それと似たような技能というか、技というか、出たものに対処するのではなくて、へ…ものの背後にあるものを予想する。

それは超人的な技ではなくて、文脈をいかに読むかということなんですけど、そういった技能が必要とされて、だからアートはある種の危うさを伴う一方、だからこそ重要な役割を果たすことができると思います。

吉川 南三陸の人は本当に恐山のイタコのところに団体バスで行くんです。南三陸町の人はすごく多いみたいです。

■ アートの創造性を公共に媒介する

——セラピストとメディアエーター—— 石谷 治寛

司会（石谷） 心理学のアートとの別の面としましては、心理査定をするということがあります。どういう病状であるのか、あるいは似たような症状の患者をかなり細かく見分けていくテクニックがあります。吉川さんは現場でいろいろな方に対応される中で、トラウマ経験のある人と接する数はもしかしたら若い経験の浅い心理士より多いかもしれませんが、心理士は心理士でそういった状況に直面しても自分自身の精神的安定を保つて、スーパーバイザーとして支援者自身をサポートしていくようなこともあると思います。そのような心理士が培ってきたものとアーティストができることをうまく役割分担できるといいのではないかと思っています。

アート・メディアエーターの潮流

私からの話題として「アートの創造性を公共に媒介する」というタイトルをつけました。最近諸外国ではメディアエーターという言葉がよく使われるようになっていきます。セラピストとアート・コーディネーターとの中間的な役割を担うタイプの人材と

表4 アートを取り巻く人々の役割

アートコーディネーター (マネジメント)	アーティスト 表現・創造	キュレーター (学芸員)
地域支援活動 (町づくり)	出来事/記憶	文化財の保存・展示
(アート) セラピスト 治療	市民・受容者	メディアエーター 媒介 (教育・普及)

介する人材としてメディアエーターという言葉が有効ではないかと私は考えています。もちろんアーティストがメディアエーター的な役割をすることもあれば、セラピストがメディアエーター的な役割をする場合もあります。あるいは、マネジメントをしている人がメディアエーター的な役割もすることもあるかと思えます。そうした役割が曖昧に重なりあってきているのと同時に、他方で中間的な立場にいる人々の役割にもっと注目し、その意義を明確にすべきではないかと思えます。

考えたら良いかもしれません。

まず従来のアートにかかわる人たちの役割を考えてみます(表4)。美術館であれば、トラウマ的な出来事や記憶は学芸員すなわちキュレーター作品の蒐集というかたちで行います。アーティストが何か創造したとき、それをマネジメントするのはアート・コーディネーターと呼ばれています。吉川さんの仕事はこのアート・コーディネーターという言葉に近いと思います。さらに、美術館などでは一種の教育・普及の仕事を担うエデュケーターと呼ばれる人がいます。特に歴史や個人の記憶を媒介する人々の役割にもっと注目し、その意義を明確にすべきではないかと思えます。

表5 言葉としての mediation、med- と mid-

med-適切に処置することを表す。medicalなどの由来として、世話をすること、治療すること。	mid-(medi-)中央・中間・中位を表す。印欧語根 medhyo-から。
medicine 医学・薬	medium 媒体
remedy 療法・治療	media メディア
meditation 瞑想	mediation 仲介・調停

最近では、アートセラピーで制作されたものを収蔵する美術館ができています。アメリカのシカゴにはナショナル・ベテランズ・アート・ミュージアムというものがあります。戦争の芸術というところ、いわゆる既成の歴史画やアートを収蔵するもの、想像しますが、この美術館は、セラピーの時に制作されたもの、つまり、退役兵が回復して社会復帰していく過程で作られた作品を収蔵して展示する美術館になっています。こうした既存の美術作品とは異なるかたちでアートが利用されるようになると、

既成のキュレーターであったり、アート・コーディネーターとは違う形で動いて、アートをサポートしたり、参加者のケアをしたり、作品を展示したりする人たちが必要になります。

そこで、もう一度、メディエーターという言葉を考えてみたいと思います(表5)。*med-*という部分が *medicine* と似ていますが、語源は違います。左側 [medicine 医学・薬、remedy 療法・治療、meditation 瞑想] は適切に処置することを表しますが、右側 [medium 媒体、media メディア、mediation 仲介・調停] は間に入るという意味を表すでしょう。

メディエーション、メディエーターという言葉がどのように使われるようになったのでしょうか。一九九〇年代には家族カウンセリングにおいて調停者(メディエーション)という考えが生まれました。この場合には、心理的に家族カウンセリングするだけではなくて、離婚協議に入ったりする場合がありすが、その離婚調停の場で法的な合意形成をするような人を指します。あるいは、世界で起きている紛争などの調停で敵対する文化の紛争のあいだに入って仲裁する人をメディエーターという言葉で表すこともあります。さらに最近では、医療メディエーターという言葉も日本で使われはじめており、医療過誤問題に法的な対応をする専門職があります。芸術や文化に関しては、フランスでは一九九〇年代ぐらいから文化媒介者 [Médiation culturelle] という言葉が使われるようになり、大学で資格を得ることができました。芸術的なオブジェを介して公衆とのコミュニケーションを促す専門職のことをメディエーターという言葉になっています。この言葉は比較的近年にさまざまな領域で使われるようになった言葉で、定義にあいまいなところがありますが、特に法、心理学、文化の問題まで幅広いあたりだに立つ人のことを指すようになっていきます。日本ではサイエンス・メディエーター [サイエンス・コミュニケーションを含むジャーナリスト・評論家およびアウトリーチ活動を行う研究者と一般市民の間に介在し、それらの活動および情報伝播が円滑に進む

ことを助けるもの」という言葉があります。文部科学省のサイエンス・メディアエーター制度ではいわゆるその専門家を養成することを提唱していませんが、いろいろな場所である種の専門家が市民とのコミュニケーションを図るために動く科学者の役割を整備しようという傾向があります。

先ほど「あなたはどんなメディアエーターですか？」という資料をお配りしました。基本的にメディアエーターとして想定されるのは、教育・普及などが中心ですが、幅広い文化の媒介的な役割をする人材を表し、アート作品の教育・普及や、美術館に専門的にいる人だけではなくて、批評家やアートにかかわる人たちを総称してメディアエーターと呼びます。アート・メディアエーターは、アートを美的に受容する人たちから、社会参加を促すタイプの人たち、社会変革というより強い力を持った人々まで広がります。実はフランスの一部では、集団療法の実践を指すのにメディアシオン・セラピューティックという言葉を使う場合もあります。従来の個人に向けてセラピーを行うこととは区別して、心に問題を抱えた人が集団的に文化活動を行うことで、緩やかに社会復帰する足がかりをつくる。それを援助する取り組みが重要視されてきています。先ほど森岡先生がおっしゃった、セラピーが変わってきている方向に近いのではないかと思います。

メディアエーターとセラピストの違いは、先ほども枠組みとい

う話が出ましたが、セラピストはある種の治療契約の枠組みの中で働かなければならないということがあると思います。ともすると守秘義務を守るという側面が強いのに対して、メディアエーターは緩やかな専門性を連携したり、配置したりするのに非常に役立つていくのではないかと考えています。

そういったことを踏まえて、アート・メディアエーターというものをもう少し日本でも整備して、その活動を議論していくような取り組みがもつと必要ではないかと個人的には考えています。

トラウマと現代アート

このような流れとは別に、現代アートではトラウマ表現的なものを使う事例が非常に多く制作されています。今日はある程度の例を用意してきたのですが割愛して手短にお話します。もともと一九世紀の歴史画でも戦争や暴力は主題化されてきましたが、近年のアートでは、特にレイプの問題を扱ったり、自分の性的体験を告白するタイプの作品であったり、最近だと退役兵の一種の曝露療法的なものをコンピューターゲームを使って行なう試みなども行なわれており、個人の被ったトラウマを社会化していくとするさまざまなかたちの芸術が試みられています。



図62 ヴォディチコ《リンカーン・プロジェクト》
2012年

ここでは最もわかりやすい例として、ヴォディチコ [Krzysztof Wodiczko] の作品を見ておきましょう。彼は日本でも広島でアートプロジェクトをやっている作家で、先頃にも来日してシンポジウムが行われました。いま画面で見ただいておきますのは、二〇一二年にニューヨークで行われたリンカーン・プロジェクトの模様です(図62)。ここで話している

問題は現在、世界的に非常に関心が持たれています。治療の側面も含めて、トラウマ的な表現をどのように考えていくのかという動きは、日本での震災とアートという問題にも共通している部分が多くあります。ヴォディチコの例でもそうですが、アーティストは自分の作品や表現を行うよりも、心の傷を抱えた人とその人がセラピー的に回復したり、公共の場で言葉を発するための媒介になっていく、つまりメディアーションしていく側面が非常に強くなっています。

アートセラピーとトラウマ

次に、アート制作と精神的外傷の問題に簡単に触れておきたいと思います。最近、東日本大震災による健常者の外傷性ストレス障害(PTSD)と脳萎縮の関連が東北大で解明されたというニュースがありました。東日本大震災によって作り出されるPTSDを巡る一種の科学的真実が発見されたということです。細かい議論をここでは行いませんが、前頭葉のある種のワーキング・メモリー、記憶をどのように自伝的記憶や無意識的な記憶と結びつけるのかということにかかわる部位が実際に萎縮し、その能力が減退していくことがあります。それがPTSDの症状にかかわってくるのが発見されつつあります。これも震災とトラウマというテーマにかかわる話題でしょう。

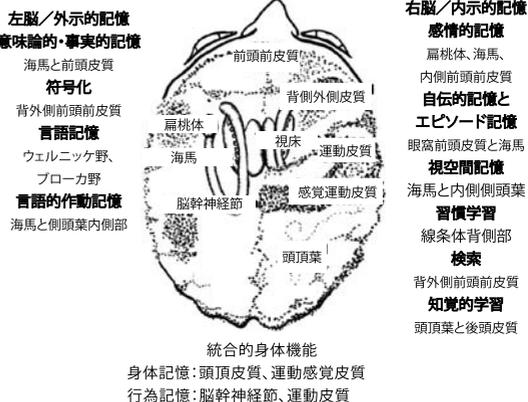
このように自伝的な記憶と公共性をどう考えるのかという問題は、現代アートにおけるトラウマの問題はさまざまな専門家がともに考えていく課題になっていきます。

近年のトラウマ研究では、トラウマは心理的、精神的なものであると同時に、ストレスによって海馬や扁桃体が実際に損傷するということも明らかにされてきており、外傷性脳損傷（TBI）Traumatic Brain Injuryと言われるようになっていきます。精神的な障害は何らかのかたちで脳の器質的・機能的な障害とも結びついていく。このあたりまで問題になってくると素人には見定めることが難しい領域になってきますし、器質的な損傷がある場合、脳には回復力があるとはいえ、アートを特効薬と考えることは難しいことになるでしょう。ただ、アートが脳の驚異的な回復力がある程度促していくということもまたありえるかもしれません。

アートセラピーで精神的治療がどのように考えられているか、最近の神経科学を踏まえた見解を紹介しておきたいと思えます（Noah Hass-Cohen and Richard Carr, ed., Art Therapy and Clinical Neuroscience, Jessica Kingsley Publishers, 2008）。まずは、現在想定されているトラウマに関わる脳の働きについて見ておきましょう（表9）。

トラウマの症状は、本能的な恐怖にたいする防衛反応を、それが安全であるように感じられるよう調整する能力が衰える症状だと言えます。そのとき、恐怖や失敗への拒絶、罪の意識、怒り、恥辱、憂鬱の感情や嫌悪的な反応が顕著になります。感情の調整をするさいに、自動的に連想される記憶がフラッシュ

表9 記憶に関する大脳半球の側性化、Robin Vance and Kara Wahlin, in Hass-Cohen and Carr 2008: 160 に掲載の図版を邦訳



海馬の萎縮は、神経系の可塑性（回復力）を弱めます。現在の神経科学では、このように記憶を束ねるために脳の部位によって異なる働きがなされると考えられていますが、意識にあがる記憶に時間的・空間的一貫性が与えられない状態がトラウマの記憶の特徴です。この記憶の働きは、受動的で身体的な自動反応をとまなう内示的（Implicit）記憶と、意識的に意味のある記憶を統合する能動的な外示的記憶（Explicit）とこう二つの記憶の働きによって理解されます。一方で前頭葉右半球（右脳）

バックをとまなう断片的な記憶として現れてくるために、一貫した物語として解釈できないという問題が生じます。この調整機能は脳においては空間的・時間的刺激を処理する視床による感覚処理の損傷に起因し、また

は、恐怖の刺激に生存のために反応し、扁桃体、海馬に左右され、感覚運動を働かせます。この部位は脊髄につながっていることから身体感覚を処理している捉えられるでしょう。この感覚運動は、視覚的な空間把握と結びついており、自分がどこにいたときにどのように感じたかという場所の記憶の断片的な細部に結びついています。このような諸感情の経験の統合は自伝的記憶と呼ばれます。たとえばカラービデオ制作は、断片的な空間的記憶を自動的・連想的に組み替えていくことによつて、自己の諸感情の統合である自伝的記憶を整理すると考えられます。他方で、生後一八ヶ月に形成されはじめると考えられる左脳は、言語的表現や理解、記憶をエピソードとして意識的に束ね物語化する能力に関与します。社会や他者に向けて意味のあるものとして論理づけ、問題解決を行う能力に関わってきます。また作動記憶（ワーキング・メモリー）と呼ばれる前頭葉皮質は、外からの感覚刺激と内的な意識的選択を変化させ、有用な情報へとテンポをあわせる注意の制御に関わってきます。この働きは、ストレスのレベルに左右される海馬や扁桃体の働きに結びつきます。一度に多くの感覚刺激や記憶に襲われ、扁桃体に課題な負担がかかって耐えられなくなると、一つの事柄に焦点を当て、現在重要でない刺激を無視するという通常の注意能力が妨げられ、負担の重い記憶の侵入に悩まされることになります。こうした意識されずに思い起こされる記憶を整理し自ら

変形させることができるようにし、それを他人や社会と共有することによつて、自己の記憶を耐えうるものにするのが、芸術制作の重要な役割になります。

表10 CREATE 芸術療法の関係的神経科学の原則 Hass-Cohen 2008: 283-309

C Creativity in Action (活動の創造性)

R Relational Resonance (関係的な共鳴)

E Expressive Communication and Emotional Processing (表現による交流と感情の処理)

A Adaptive Response (適応性のある対応)

T Transformation and (変容と共感)

E Empathy (表現による交流と感情の処理)

and Emotional Processing)

こうしたアートの治療的な働きは、さまざまな感情や記憶が整理される段階に沿つて、それぞれの頭文字をとつてCREAT Eと定式化されています(表10)。Cは、活動の創造性(Creativity in Action)で、体を動かして感覚運動を働かせ、単純なカタチや色彩に取り組み、身振りや活動を見よう見まねで行うことで、感情を動かし、そのコントロールと達成感をグループで共有します。R 関係的な共鳴は(Relational Resonance)で、ライフストーリーを共有することで、他人との信頼関係や安心感、愛着を築きます。家族の間での記憶の共有や語ることが重要だというお話がありました。そういった人がなかなか話せない場合には、セラピストやアート・コーディネーターがいしメデイエーターのような話しやすい人、安心できる人に話していく。Eは、

で、恐怖の感情やストレスにたいする反応を自ら調節し処理できるようになることです。恐ろしいイメージをより優しく安心できるイメージの経験と組み合わせ、意味を生成し変化できるようにします。Aは適応性のある対応 (Adaptive Response) で、より長期的・継続的に自分のストレスを自分でコントロールできるように免疫系を強化させる段階です。複雑で混合した変わりやすい記憶を明解で単純な形態、構築的な媒体を用いて堅固なものにします。最後にTとEは、変容と共感

(Transformation and Empathy) で信頼感を通して、自分自身と他者を理解することを学びます。社会性の構築には、イメージや物語を通して互いの心を察することができ、お互いの苦痛を共有しともに和らげることができるようになることも必要です。自分のストレスの処理だけでなく、他人の心の働きを気遣えるところまで進むことで、はじめて治癒ということが言えるでしょう。

心理的記憶をいかに公共に媒介するか

このようにアートを通したトラウマの解決には社会的なコンフリクトを緩和することまで含まれ、長期的なスパンで取り組まれる必要があります。私がセラピーに加えてメデイエーションという言葉を考えたいのは、個人的な感情のコントロールの

段階から、社会に向けて表現して共有する過程で、精神医学の専門家だけの力を越えた取り組みが必要だと考えているからです。たとえば、スイスにあるヨーロッパ大学の表現アーツ修士課程は、三つのプログラムがあり、メデイエーションが教育されています (<http://expressivearts.egg.edu/masters-programs-na>)。一は、表現アーツで、精神病理学、健康や病気に関する

芸術を学びます。これは従来の精神分析学や臨床心理学に基づく芸術療法です。二は、想像力と日常生活の架け橋となる芸術を用い、効果的で創造的で解決策に向かうカウンセリングを行えるようになることが目標とされています。これは認知行動療法の考え方に近いでしょう。リーダーシップやコミュニケーションを高めることを望む人に向けた教育プログラムだと言われています。さらに、三は、芸術による紛争の分析的な調停 (メデイエーション)、正義の回復、トラウマの気づきと癒やし、人道的な対応と調査を結びつけた枠組みが挙げられており、紛争分析、仲裁、平和構築の手法が応用されています。この大学の教師でもあるカナダ出身のアートセラピストのレビンは、心理学的なアートセラピーをより社会活動に結びつける必要、アート・イン・アクションを提唱し、より現場の状況やグループでのアート活動に焦点を合わせた考えについて述べています。そういったアートセラピーの領域のなかでの変化が起き始めている中、メデイエーション、仲裁の方法論は今後ますます重要になると

思います。

さて、そのことを踏まえてより社会理論的な議論に踏み込んでいきたいと思えます。個人の記憶の問題はそれがいかに公の場に表明されるのか、いかに共有され、個の経験が束ねられて集合的な記憶が立ち現れてくるのかという問題は長らく議論されてきました。たとえば記憶文化研究者のアライダ・アスマンはその記憶論のなかで、個々の記憶の集まりや総体を蓄積的記憶とし、それを現在の文脈で想起しようとする方向づけを機能的記憶と定義しています（アライダ・アスマン『想起の空間——文化的記憶の形態と変遷』安川晴基訳、水声社、二〇〇七）。

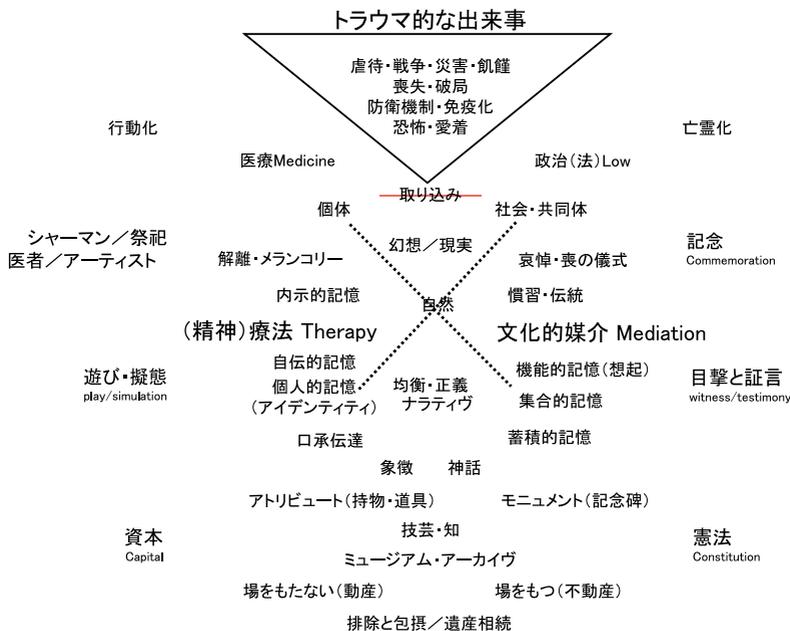
ある出来事の記念を行なうということは、この想起するやり方の方向付けに関わります。しかし、トラウマというのは災害の場合のように基盤となる蓄積的記憶がすっかり喪失したり破壊されたり、ひとつに方向づけられない混乱した状態にあったりすることを表しています。さらに、近年の社会学の研究が明らかにしているのは、記念行事を行うときに、内部対立がある場合、あるいは過去の出来事が現在の利害関係に非常に強く結びついている場合、「記念というのは分断された形でなされる」ということです。単に個々が記憶を表明すれば誰にとってもよい記憶で丸く収まるかというところではありません。必ずある記憶に対立する別の記憶のあり方があって、公共化される記憶の領有をめぐる分断が起きてきます。また、記憶の商業化、

美化、抵抗や忘却、社会的圧力によって記憶は政治化され抑圧されると考えられています。つまりある記憶が公共化されるということ自体が、別の人にとって、自分の経験が軽視されたり、十全に記憶を表す場が占有されていると感じたりすることが大いにあり得るわけです。そのとき必要なのは、分断された個の記憶を社会的に凝集し、共有できるオルタナティブな物語に変化させ創りだす必要性です。そうした調停のプロセスに関わっていくためには高度でセンシティブな状況に忍耐強く対応できる専門的なノウハウをも学んだメディアエーターの力が必要です。

もちろんセラピストがメディアエーターの役割を担うこともあれば、アーティストがメディアエーターの役割を担うこともあります。先ほど目撃や証言ということも出てきましたが、トラウマの問題で重要なのは、直接的な被害者・被災者のサポートも重要ですが彼らが十分に語れないときにそれを見守る二次的な目撃者の存在が欠かせません。法廷の場を考えていただければわかりますが、ある主観的な出来事が公的に真理だと認められるためには、目撃者の証言が不可欠です。

心理的な記憶が、公的な記憶あるいは真実として共有されるプロセスは錯綜しておりますので、図式化してみました（表11）。通常は個人と共同体の関係は幻想と現実をお互いに包含しながら維持されているのですが、災害や暴力に脅かされる経験によってそのあいだに亀裂が入り、個と集団の関係性を調整する習慣

表11 ト라우マの出来事と記憶をめぐる概念図



や決まり事が働かなくなってくる。そうしたときに個人は解離やメランコリーを表し、社会的には、哀悼や喪の儀式を行うことによって調整を図ります。それがうまくいかないと個人としては逸脱行動(行動化)が目立つ場合があり、うまく社会化されない幽霊が現れて崇められるとも言えるかもしれません。

特に近代化とは、それらを調整する役割が高度な専門性によって分業化されてくる社会ですので、かつてはシャーマンや祭祀と呼ばれた人々が医者やアーティストになり、セラピストやメディアエーターという個別の専門家が必要になってきます。物語とは、この個人的記憶と集合的記憶に均衡やさらに言えば正當性や正義を与えるものと言えるでしょう。哲学者のベルクソンやピエール・ジャネらは集合的・社会的記憶として、人間の仮構作用(フアブリケーション)の能力、すなわち神話のようなものを創りだし宗教に高める力を想定しましたが、記念碑というのはこの神話の力を具体的なかたちや場に位置づけ直すものです。これはまた一様に解釈できるものでなく、多様な記憶や意味づけに開かれたものなので、個の記憶と公共の記憶とを媒介するテンプレートになっていく。記念碑は基本的に広場に置かれ共同体の目印のようになりますが、場を持たない記念物もあります。それはおみやげのようなもので、人から人に渡され、動産として残され、場を離れていく。それはやがて交換されたりする宝石などの装飾品も考えられるでしょう。

この個と社会のあいだには、必然的に包摂と排除のロジックが働いているということも忘れてはなりません。共同体に収まりが悪かったり、そこからあふれ出たりするものは結局排除されたりトラウマ化せざるを得ませんが、この共同体の外に別の共同体や慣習を創ることによって力を持ち、それが再び共同体に包摂されるということもあるでしょう。こうした離散と帰還のプロセスは多くの神話が教えるところです。ものの記憶、集合的記憶が結晶化した形は、診療記録、自伝作品や芸術、さらには法廷記録として残されますが、これらはその記録が公的な記録として編纂されるなかで（公文書、判例、美術收藏品）、法の領域にそれぞれのやり方で接していきます。集合的記憶とは、これまで共同体に場をもたなかった記憶に場を与えるためのある種の権利要求がともなうと考えるならば、表現したり言葉を発したりする行為やそれを編纂していく過程には、法を制定するための権力が密接に絡みあっていることも忘れてはなりません。法なしそれを基礎づける憲法は記憶の公共性の存立自体を支えています。

こうした文脈のなかで、哲学者ジャック・デリダによるアーカイヴ論をここで引いておきたいと思います。ちなみにデリダは精神分析学の始祖フロイトの資料館のあり方について述べるために、アーカイヴという西欧文化にとつての意義を語源から辿りなおしたのですが、ここではより突っ込んだ議論には踏み

込みません。

「アーカイヴ」の意味、その唯一の意味は、ギリシア語の *arkhion* に由来する。それは当初、上級政務官の、アルコンの、支配していた者たちの家であり、住居、住所、逗留地であった。政治的な力をこのように保持し示していた市民たちには、法を作成したり代表したりする権利が認められていた。このように公に認められた彼らの権威が尊重されたので、その当時公文書館は、彼らの元に、彼らの家（私宅あるいは家族の家、公務の家）であるこの場所に、保管されたのである。アルコンは何よりも、その管理人である。彼らは、委託物と記録媒体の物質的安全を保障するばかりではない。彼らは、アーカイヴを解釈する権力を持っている。そのようなアルコンに委託されたこれらの記録資料は、実際に法を告げる。すなわちそれらは、法を召喚し、法に立ち戻らせる。このように保管されるためには、この法を告げるといふという権限にとつて、管理人と置き場が同時に必要とされていた。アーカイヴは、その管理人の仕事や解釈学的な伝承においてさえ、記録媒体や居住地なしで済みますことはできなかった。

このように、アーカイヴが生じるのは、この住居を定めることにおいて、この逗留地の指定においてである。その逗留地は、アーカイヴが留まり続けるこの場所は、私的なものから公的なものへのこの制度的移行を跡づける。これは必ずしも、秘密のものから秘密でないものへの移行を意味しない。……そのような地位にあつて記録

資料は、いつも言説を書いたものとは限らないが、或る特権的な位相のおかげでのみ、アーカイヴという題の下に保管され分類される。それはこの特殊な場所に、法と特異性が特権のうちで交差するこの選ばれた場所に住まう。位相論的なものと法規範論的なもの、場所と法の、記録媒体と権威の交差点において、住居を定める場面が、可視的になると同時に不可視的になる。(ジャック・デリダ『アーカイヴの病』福本修訳、法政大学出版、二〇一〇年)

デリダは、アーカイヴというものが法を支配していた者の住居、場所を示すものであると言っています。そういった権限を行使できる人たちが政治的な力を誇示する場所が問題にされています。その場所は解釈や専門知識によって保証される。

「記録資料は実際の法を告げる」というのがデリダの見解の面白いところです。蓄えられた集合的記憶は、法を召還して立ち戻らせる。あるいは、法を打ち破る可能性を持っているわけです。先ほどのきりこの話で言うと、きりこを立ててはいけないのをおそるおそる立てていたという話がありました。そのように喪失した個の記憶を公に表明することは時には法に微妙に抵触していく部分がある。けれども、市民が支持さえすれば、法の執行をある程度止めさせたり、引き延ばしたり、あるいは革命のように覆していったりする力もあるものなのではないかと思えます。

個人的なものとの公的なものをどのように結びつけるのかとい

うときに、「アーカイヴがとどまり続けければ、私的なものから公的なものへの制度的移行を跡づける」と言っています。ミュージアムというものも近代国家の中では法の管理によって文化財を保存するものです。法の中で保存される記憶をどのように扱っているか、いかにそれに正当な場を持たせるのかということ、今回の災害でアートの喫緊の課題として認識し直されたことだと思います。

そうしたときに、記憶の記録や記念物の解釈の権限やその権利をどのように確保していくのか。セラピストの役割を、あえて心理的なことや健康にかかわるものと役割分担をするならば、どのようにして個々の記憶のもつ力を文化として担保し、それを行政や政策のレベルでも調停し意味のあるものにしていくのか。メディアエーターが今後担うべき重要な課題なのではないかと思えます。

またここに付け加えるべき重要な観点としては、トラウマというもののあり方が、歴史の記憶として想定される場合、時間がずれたり、記憶が記録として残されることによって当初とは別の受けられ方をしたりすることにあるでしょう。記憶の問題は即時的に解決される問題ではなく、遅れて存続していくという特徴があります。複雑性のPTSDの問題にも関わりますが、この時間の遅れを解きほぐしていくという困難な作業が必要で、さらに公的記憶がある種の抗争状態にあるときに、トラウ

マを解きほぐしたり、メディアエーションしたりすることでそれまで予想していなかった側面も現れてくるでしょう。公的記憶の別の語り方を構築する作業は、時間の遅れをかたちにできるアートの大きな役割なのではないかと思えます。

また時間的な遅れの問題とあわせて空間的な広がりも重要でしょう。吉川さんは、チリの人に向かって記憶を共有していくということも行っています。目撃者という先ほどの概念と関連させるならば、ある地域共同体だけではなくて、より広いウィットネスとの関係性をどのように構築していくのかというのも一つのトラウマ文化の課題ではないかと私は考えています。夜にキャンドルなどを掲げるビジル（寝ずの番）という取り組みがありますが、遠くからでも、事態を見守り気持ちを寄せるという心のあり様は、トラウマに共有して向きあおうとするケアやアートの本質に関わるでしょう。

アートプロジェクトやアートで市民参加を促す近年の取り組みを、どのように評価していくのか、それが美的な経験とどのような関係するのかという問題もまたありますが、それについてはまた別の機会に考えていければと思います。とりあえず私からの話題は終わりにします。

■討議・質疑 2

森 公的記憶として、トラウマ文化は特殊な位置にあるのか。公共的な記憶はトラウマに関わるものだけではないですが、その辺いかがですか。

司会（石谷） 特に近年の欧米での文化論なんかを見ていると、一九九〇年代にユダヤ人の虐殺や強制収容所の経験すなわちホロコーストが非常に象徴的にトラウマや記憶文化論が練り上げられていく下地になった部分はあると思います。ある種の世界的な枠組みでユダヤ人虐殺の問題が関心を持たれて、文化研究に非常に大きな影響を与えました。

そこから派生して、現代は文化的なトラウマという概念が表れてきて、そのことが様々に議論される状況になっています。

そこには、政治的暴力、拷問被害者の問題から、ルワンダやボスニアヘルツェゴビナやパレスチナでの虐殺に対する注目など多分化主義化する傾向があり、過去の奴隷制から、現在の人身売買被害者まで議論されます。さらに、スマトラの津波からハイチの地震、そして日本での災害のように、文化的なトラウマの問題として世界的に共有して議論されるような広がりを持っています。ただ、今日の議論で、誰に対して語るのかという問題がでしたが、世界に対して語るといことが、個々の地域

に暮らす人たちにどのように受け取られるのかとか、誰が代表して語れるのか、といった問題も出てくるでしょう。

経験の単独性がどのようにユニバーサルな経験として語られるのか、語られないのかという問題ですが、チリが話題になっていて、森先生がご紹介したNETの技法はわりとチリの国内的な問題、内戦のときの経験とも結びついていて実践されたという話をちらっと聞いたことがあります。そこら辺のトピックへと広げられるでしょうか。

森 それはどうでしょうかね。NETは曝露療法と証言療法という二つの治療法のアイデアを組み合わせたものです。証言療法はチリの拷問被害者に対する治療から発生したということをお申し上げました。

ただ、チリの実践がそのままNETにつながっているわけではなく、ドイツでNETを開発するときにその経験を生かして新しい技法として作られたということです。ただ、トラウマ経験はユニバーサルなものと考えられていますので、どこの地域によるものでも、ほかの地域のトラウマ体験と共通性を持っているという感覚があると思います。

司会（石谷） ユニバーサルな技法としてトラウマに向き合うことができるという側面と、先ほど議論に出てきましたけれども、日本人だと語りにくいという文化的な差異もあります。文化的と言ったらいいいのか、社会的認識や教育の仕方の差異と言っ

た方がいいのではないかと私は考えておりますが。

吉川さんはチリに行かれて、チリの子どもたちと日本人の子どもたちでつらい出来事に対して向き合い方が違う印象はありましたか。

吉川 全然そのぐらい深くつき合っていないですね。町はそのままなんです。被災していないというか、もう三年たつていまして、三ブロック先まで津波が来たとおっしゃっていましたが、でも、そう流出は激しくありませんね。なので、直接的な被害を受けた子どもはたぶん少なかったのだらうと思います。

南三陸町の状況を話したところ非常にみんなびびくりしていたので、トラウマを持っている子がいるかどうかさえわかりませんでした。普通の、被害を受けている子どもたちという感じではないように見受けました。

ただ、さっき出てきた民宿が全部流された女の子に関しては全く家がなくなっていて、いま民宿の一室で家族が過ごしているの、自分のリアルな経験に基づいた素晴らしいコメントになっていました。彼女の言葉は志津川高校の生徒たちにはダイレクトに響いたと思います。

兼子 近畿医療福祉大学（現在、神戸医療福祉大学）の兼子と申します。私はアートセラピストの全国実態調査を始めています。さつき吉川さんの活動にもともとセラピー的な意識が有ったのか無かったのか、最初に確認した者です。実は、調査の過

程で見えてきていることですが、アート側の人たちが、セラピー的な意識があるかないかは別として、とにかく傷ついた心を癒したいという目的でセラピー的な活動に参入してきています。いま石谷先生がおっしゃったアート・メディアエーターという職業ジャンルは日本では認識がないので、(セラピスト的な活動をするアーティストの呼称として)あり得るのかなということが認識できたので、それにお礼を申し上げます。

次に後半部分(公共)の話ですけれども、例えば私の所属する大学は社会福祉の大学ですから、公共性の問題にも福祉的な観点でかわらざるを得ないところがあります。私の専門は社会学なものですから、つまりそのような立場から見ると、公共的な記憶というのは政治性の問題とか、(その関わり方によって)他にもいろいろ問題があるわけですね。吉川さんが悩んだように、やはり政治が関与してくる。国際交流のように、必ず外交が入ってきますし、企業も入ってきますから、非常に複雑な問題になってきますね。それをどう処理するかということはアートだけの問題で収まらないので、学者とか、いろいろな人が入って討論しなければいけない問題だろうと思います。

社会学から言えることは、日本の場合でも沖縄戦とかで最終的に慰霊碑には戦士や住民を含めて被害者の名前を出しましたけれども、その前は各県人別の石碑だけです。グアムなんかに行ってもそうです。これに対し、特に戦勝国のアメリカの

場合は国家単位でかなりきれいな記念碑を立てた。記念碑研究ではこのような事例について記念碑がどういうものか、アートの価値はどうか、どのように政治性や社会構造が表象されているかといった解説が一般的です。この点からメディアエーターが今後担うべき課題とは、これまでの記念碑研究に近い役割や意味を持つているのか、それとも別の意味合いを持つているのかちょっとわかりにくかったものですから、そこら辺をもう少し説明していただければいいなとは思いました。

司会(石谷) ありがとうございます。記念碑の問題だけをとり、個人の名前を刻んだり、歴史的にも公共性の捉え方が異なってくる部分がありますので、それがどのように個人のトラウマという問題と関連するのか、あるいは、記憶が風化したときに、現代アーティストがさまざまなかたちで歴史や記憶を掘り下げたり、メディアーションというかたちの取り組みによって記憶を再活性化するのか、それぞれ個別の場合に即して考える必要もあるでしょう。心理学、社会学、人類学、歴史学、平和学、芸術学などの専門家が意見を寄せ合う場もいっそう必要だと思います。

本日はこちら辺で閉めたいと思いますが、最後に森先生と吉川さんに一言ずついただいて終わりにしましょう。

森 こんな機会を持って、大変うれしく思いました。私は東日

本大震災はすぐ気になりながら、本務仕事が大変であり貢献できていません。常に罪悪感みたいなものがどこかにありました。これから何かの形でつながる時期が来るのではないかと感じています。長期的に関心を持っていきたいと改めて思った次第です。どうぞよろしくお願いいたします。

吉川 本当にセラピーとかPTSDとか専門的な知識がないままにいろいろなことをやってきて、これはすごい間違いだったらどうしようという危惧はいつも持ちながらやっていたので、今日は専門的なお立場からのお話をいろいろ伺って、非常に参考になりました。大阪とかからボランティアでカウンセラーの人たちが時々通ったりしてくれているので、何かワークシヨップをやるときにそういう人たちと一緒に協働できる機会もぜひ実験的に作ってみたいものだなとも思いました。今まで全然そんなことを考える余裕もなかったんですけれども、今日の皆さんのお話を聞いて思った次第です。

被災地は流されたまま何ら変わっていない、零細企業ながら立ち上がろうという人には全然援助がありません。南三陸町だと水産加工業のパートとかで暮らしてきた人たちなので、もともとの給料は安いんですね。その安かったところに緊急雇用で今までの倍も三倍もの給料がおりてきていて、みんな一種のバブルになっている。だから、真面目に自分の企業を復興しようと思っても、従業員が集まらない。

それから、高台移転を決めたものの、自分の土地を持っている人はすぐ建てたいわけです。そうすると、今まで山だったところに家が建つと雑排水をそのまま山に直接捨てるようになる。そうすると、何億円もかけて塩害から救った田んぼに雑排水が流れ込む。海も今雑排水が全く入っていないので非常にきれいなんです。やがてそういう水が入っていく。それを規制する法律もないということがこの頃わかってきています。

マスコミで騒いでいるような「陸前高田の松がきました」とかいうのは、私たちにとっては何の復興でもない。陸前高田の人にとっては復興かもしれないけれども、皆さんのこれからの不安というのはそういう問題ではないと思うんですね。例えば、高速道路はすぐできるのに、高台に逃げるための道路は全く拡幅されないために、二〇一二年一二月の頭に津波警報が出たとき、やはり渋滞して登れない車がいっぱいあったんですね。なぜ、莫大な予算で高速道路の橋脚は建つのに、大した予算もかからないような高台への道の拡幅ができないのかなと私は素人ながらに思うわけです。

だから、政治家なんて誰も本当に被災者の立場になって考えてくれないと断言できますし、マスコミも悲劇の美談みたくのを探しに来る。それで生半可の報道をして、その後いろいろなクレームがついて商品が販売できなくなったりとか、そういうことがいっぱいあるんですよ。仙台までおいでになった

ら、私のほうでご案内できませんので、一度南三陸町にもお出かけいただけたらなと思います。関心を持っていただくことですね。何かするということではなくて全然構わないので、今日縁がありましたので、南三陸町がニュースに出たら、ぜひご注目いただければと思います。

司会（石谷） ありがとうございます。私自身も実際に援助活動をしているわけではありませんので、関わるときの距離感も難しいところがあります。甲南大学では二年前にカウンセリングセンターで避難者や援助者でPTSDがしんどいという方の無料カウンセリングを呼びかけたり、対応のガイドラインを策定したりというかわり方を模索したという経緯があります。

そうした中で、先ほどカウンセラーはいすに座っているだけというお話があったように、向こうから来ないところらもどこまで関わるができるのか、関わるべきなのかということの判断が難しいことがあるかもしれません。職業的な範囲をわきまえるということだったり、別の事柄に取り組んでいたりと直接的な行動としてはなかなか動けないということも良く理解できます。そうした場合に、助けを必要としているということをそれぞれが素直に人に伝えていくということも支援者との連携をよくしていく方法なのではないかと思います。援助者のPTSDの心配もありますので、吉川さんもしんどいときは助けをすぐにも言えるような気持ちでいただければと思っています。

今日は長い時間になりましたけれども、どうもありがとうございます。また何か似たような企画がありましたらお知らせします。ぜひとも議論の続きに加わっていただければと思います。「拍手」

〈終了〉

fields in order to respond to this question. First, as an expert in psychotherapy for PTSD, Dr. Mori introduced his approach of 'Narrative Exposure Therapy' which is based on listening to subject's life stories and experiences in Kobe during World War II ('Narrative of Experience of war and psychotherapy of PTSD'). Second, Yumi Yoshikawa talked about her experiences as a curator working with participatory arts practices in the town of Minamisanriku before and after the Great East Japan Earthquake (March 11, 2011). These practices included the making of Kiriko (Paper crafts) or composing choral works whose lyrics were formed of people's own stories and memories ('Resilience of power of living: art practices in the town of Minamisanriku'). Third, Haruhiro Ishitani focused on the notion of mediation - both in theory and practice - in the fields of contemporary art and art therapy ('Mediating traumatic memories from a private sphere to a public sphere through art practice: the therapist and mediator').

Art, Narrative, Trauma and Disasters:
Discussions on the role of mediators of memory (abstract)

Shigeyuki Mori¹, Yumi Yoshikawa², Haruhiro Ishitani³

After the Great East Japan earthquake, various art practices began to emerge that focused on personal stories of victim's experiences and memories and responded to the imperative: "Don't forget the disasters". These 'memory collection' projects and practices quickly became widespread, with collections of personal stories exceeding the numbers collected following the 1995 Hanshin-Awaji Earthquake. The term PTSD (Post-Traumatic Stress Disorder), entered popular culture and public consciousness around this time.

The centre where we carried out this discussion was also constructed on a site of trauma. Beneath the building was once the rubble and remnants of University buildings destroyed in the earthquake in 1995. Approximately half of all buildings at Konan University were destroyed by the 1995 quake. It made sense then, for this centre - built in 1997 upon this site of trauma - to be centred on the counselling of students and research concerning the care of the mind. The researchers and professors who were invited to the centre to confront these issues were drawn from various fields within Human Studies from psychotherapy, art therapy and philosophy, making the institute uniquely inter-disciplinary.

In this seminar, we focused on the significance of notions of mediation by means of art and narrative approaches to psychotherapy, specifically concerning trauma experienced during a disaster. When a subject begins to write about, speak about or express (we will use the term 'expose') their traumatic memories, it is important that this exposure is safely and trustingly accepted by consultants or someone who the subject is intimate with. We refer to this trustee of the subjects memory here as the mediator of memory and it is their safe mediation of traumatic memories that can bring the subject confidence and allow their experiences to be publicly acknowledged in their community. In order to regulate psychological memory (therapeutic practice) and to mediate the personal memories to the public (mediation), we asked a question of what kinds of cooperation between practitioners of arts and the psychotherapists should take place?

In this discussion, three speakers presented their arguments from their respective

1 Psychotherapist, Konan University

2 Art Coordinator, ENVISI

3 Art Historian, Postdoctoral Researcher, Konan Institute of Human Sciences